

学内広報

2019.4.22

no. 1521



入学式で祝辞を述べる上野千鶴子先生 (4月12日)



志ある卓越。



平成31年度役員等の紹介
平成30年度卒業式・学位記授与式
平成31年度入学式・大学院入学式

平成31年度役員等の紹介

平成31年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長

(任期)平成27年4月1日～令和3年3月31日

五神 真

理事・副学長

福田 裕穂

(担当)総務、入試・高大接続、評価

宮園 浩平

(担当)研究、施設、懲戒

藤井 輝夫

(担当)財務、社会連携・産学官協創

松木 則夫

(担当)教育、学生支援、ダイバーシティ

白波瀬 佐和子

(担当)国際、広報

理事

境田 正樹

(担当)コンプライアンス、監査、病院

里見 朋香

(担当)事務組織、法務、人事労務

監事

澤井 憲子

服部 彰

大学執行役・副学長

相原 博昭

(担当)学術長期戦略

有信 陸弘

(担当)研究倫理

熊野 純彦

(担当)図書館

佐藤 健二

(担当)人文社会科学資産活用戦略

羽田 正

(担当)国際求心力強化

光石 衛

(担当)環境安全

森山 工

(担当)人文社会科学振興

渡部 俊也

(担当)産学連携

副学長

岡部 徹

(担当)渉外・産学協創

関村 直人

(担当)国際、日本語教育

津田 敦

(担当)地域連携、渉外・卒業生、復興支援

吉村 忍

(担当)産学協創振興

副理事

稲垣 博明

(担当)柏地区整備、柏地区事務機構長、イノベーションコリドー

奥抜 義弘

(担当)広報戦略、危機管理・情報共有、業務改革推進・普及

梶 正治

(担当)女性活躍推進、ダイバーシティ、働き方改革

塩崎 英司

(担当)病院運営

鈴木 敏人

(担当)研究倫理、研究費・研究不正対応

戸張 勝之

(担当)経理・調達

平野 浩之

(担当)財務制度改革、資金・資産運用

山本 貴史

(担当)SDGs・社会実装

総長室顧問

岡本 和夫

杉山 健一

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

沖 大幹

(担当)国際協力

喜連川 優

(担当)デジタルデータ活用

橋本 和仁

(担当)科学技術制度

藤原 帰一

(担当)国際関係

総長特任補佐

有馬 孝尚

(担当)IR(総括・研究)、イノベーションコリドー

大日方 隆

(担当)IR(管理運営)

小山 博史

(担当)IR(社会連携)

川崎 雅司

(担当)研究力強化

坂田 一郎

(担当)総務補佐、運営企画補佐、外部連携企画

佐藤 仁

(担当)国際広報、総務補佐

高橋 浩之

(担当)産学連携推進

出口 敦

(担当)柏地区整備

中村 宏

(担当)情報基盤整備

難波 成任

(担当)EMP

林 香里

(担当)国際関係

矢口 祐人

(担当)学部教育国際化

山嵜 達也

(担当)病院・施設関係

渡邊 聡

(担当)国際関係

新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新大学執行役・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任の挨拶を以下のとおり掲載します。

理想の学びと研究環境作りを目指して

この度、理事・副学長を拝命しました。研究、施設などを担当します。

私は医学部の出身で、がんの分子メカニズムの研究に携わってきました。私は1986年からスウェーデンに滞在し、1990年からは研究室を主宰する立場となりました。研究室にはヨーロッパ各地から研究者が集まり、議論を交わしながら楽しく研究を行うことができましたが、こうした経験を日本でも生かしたいと考え、1995年に帰国しました。当時大塚にあった癌研究所で5年間研究を行い、2000年より東京大学に戻って今日まで研究・教育を続けています。

東大に戻って以来、間もなく20年を迎えようとしていますが、日本での学びと研究の環境

は大きく改善したと感じています。そうした中で東大の強みは、多様な分野の専門家が揃い、交流を円滑に行うことができることで、これは世界に誇れるものだと思います。私自身、様々な研究科、研究所の方々と交流を行うことで自分なりに面白いと思う研究ができたことを深く感謝しています。

東大では五神総長のリーダーシップのもと、国際卓越大学院をはじめ、教員・学生が円滑に研究を行うシステム作りが進んでいます。研究環境も課題は残されていますが、改善すべく検討が進められています。今後は、理想的な学びと研究の環境を作り、次世代をリードする研究者の育成に向けて貢献したいと考えています。皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

理事・副学長

宮園浩平

Kohei Miyazono



昭和56年3月 本学医学部医学科卒業
昭和58年6月 本学医学部附属病院第三内科入局
昭和61年5月 スウェーデン王国ウプサラ大学ルードヴィヒ癌研究所研究員
昭和63年7月 本学医学部附属病院第三内科助手
平成元年12月 医学博士（東京大学）
平成2年2月 スウェーデン王国ウプサラ大学ルードヴィヒ癌研究所研究員
平成7年4月 財団法人癌研究会癌研究所生化学部部長
平成12年8月 本学大学院医学系研究科・医学部教授
平成23年4月 同 医学系研究科長・医学部長
専門分野：分子病理学、分子腫瘍学
研究内容：1) Derynck, R. and Miyazono, K. eds. "The Biology of the TGF- β Family." *Cold Spring Harbor Perspectives in Biology*, 2017 2) Miyazono, K., Katsuno, Y., Koinuma, D., Ehata, S., and Morikawa, M. "Intracellular and extracellular TGF- β signaling in cancer: some recent topics." *Frontiers of Medicine*. 12 (4): 387-411, 2018. doi: 10.1007/s11684-018-0646-8.
趣味：数独、相撲観戦

大学と社会との新しい連携関係の構築、次のステップへ

昨年4月に大学執行役・副学長を拝命してから早いもので1年が経ち、このたび理事・副学長の任に就くことになりました。担当は、財務、社会連携・産学官協創ということで、昨年度新たに設けられました社会連携本部の本部長も引き続き務めさせていただきます。

本学は現在、五神総長のもと、社会の変革を駆動する新たな大学像を打ち出し、多岐にわたる取り組みを展開しています。特に、指定国立大学としての構想の実現に向け、国連で定められたSDGsを活用しながら、社会との「連携」を越えてより良い未来社会を「協創」する未来社会協創（Future Society Initiative: FSI）には全学を挙げて取り組んでいるところです。

昨年度はたとえば東京大学エクステンション（株）の設立やFSI基金の創設、新たな資金ならびに資産受け入れ制度の整備等、FSIの取り組みを支えるための様々な経営的基盤の構築に務

めて参りました。

一方、卒業生をはじめとする大学を取り巻く人的・組織的ネットワークを強化する一環として、広く卒業生団体との連携強化を図るとともに、たとえば海外や地域の同窓会組織とも協力して東京大学基金への寄附等をはじめとする大学への支援の充実を図るべく努力を続けております。

今年度からは、新たに財務を担当することになります。大学が自律的な組織として自立するためには、財政基盤をより一層安定なものとするだけでなく、持てる資産を有効活用することが極めて重要です。

新しい年号となる今年、大学と社会との関わりが次の段階へとステップアップする元年となるよう微力を尽くす所存です。皆様からのお力添えを賜れば幸いに存じます。

理事・副学長

藤井輝夫

Teruo Fujii



昭和63年3月 本学工学部船舶工学科卒業
平成2年3月 本学工学系研究科船舶工学専攻修士課程修了
平成5年3月 本学工学系研究科船舶海洋工学専攻博士課程修了（工学）
平成5年4月 本学生産技術研究所客員助教授
平成6年11月 本学生産技術研究所助教授
平成7年4月 理化学研究所基礎科学特別研究員
平成8年4月 理化学研究所研究員
平成11年4月 本学生産技術研究所助教授
平成19年2月 本学生産技術研究所教授
平成24年4月 本学総長補佐
平成25年4月 本学生産技術研究所副所長
平成27年4月 本学生産技術研究所長
平成30年4月 本学大学執行役・副学長
専門分野：応用マイクロ流体システム
研究内容：1) Fujii, T.: "PDMS-based Microfluidic Devices for Biomedical Applications", *Microelectronic Engineering* 61-62C (2002): 907-914 2) Fukuba, T., Aoki, Y., Fukuzawa, N., Yamamoto, T., and Fujii, T., "Microfluidic in situ Analyzer for ATP Quantification in Ocean Environments," *Lab on a Chip* 11 (2011): 3508-3515
趣味：水泳、緑道ジョギング

東京大学のグローバル展開に向けて：国際化と国際発信

このたび、国際と広報担当の理事・副学長を拝命いたしました。国際化と広報、いずれも、東京大学として課題の多いところです。本学を構成する先生方お一人お一人は、学術界において国際的にも高く評価され、国際共同研究プロジェクトにも多くかかわっておられます。ただ、国際化の中身や、国際化の評価は、理系・文系の別のみならず、それぞれの専門分野によっても異なります。

欧米を越える日本型モデルの存在に海外の研究者が大きな関心を寄せ、アジアで最初に産業化を成し遂げた日本の優位性が際立った時代もありました。しかし、その時代は過去のものとなり、欧米対日本の構図から、台頭する他のアジア諸国とも連携し、日本の国際展開は新たな

局面を迎えています。さらに、理系、文系の枠を超えて、新たな科学、知を創造しようとするとき、東京大学が取り組もうとしている挑戦を外に向けて発信し、国外の大学を巻き込んで研究や教育を展開することもこれまで以上に重要になってきました。

さまざまな分野で研究が進められ、日進月歩の変化と競争が繰り広げられる中、国内外から優秀な学生、研究者を募ることもまた必要です。東京大学の歴史と伝統を軽んずることなく、かといって伝統にすがることなく、東京大学らしいグローバル展開が求められています。微力ではありますが、本学の国際・広報事業に少しでも貢献できれば幸いです。どうかよろしくお願いたします。

理事・副学長

白波瀬佐和子

Sawako Shirahase



昭和56年3月 同志社女子大学卒業
昭和58年3月 お茶の水女子大学大学院修士課程修了
昭和60年1月 ハーバード大学大学院社会学専攻・研究大学院生
昭和61年9月 オックスフォード大学大学院博士課程社会学専攻
平成元年1月 コロンビア大学東アジア研究所・若手研究員
平成9年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
平成15年4月 筑波大学大学院システム工学研究科助教授
平成18年4月 本学大学院人文社会系研究科助教授
平成22年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
平成25年4月 本学総長補佐
平成26年4月 本学総長特任補佐
平成27年4月 本学人文社会系研究科・副研究科長
平成29年4月 本学広報室長
平成30年4月 本学副学長（国際担当）
専門分野：社会学（社会階層論・少子高齢化論・社会保障制度）
研究内容：1) Shirahase, Sawako. *Social Inequality in Japan*. London: Routledge, 2013 2) 白波瀬佐和子「小さな世帯の増加と社会保障」『社会保障研究』Vol.2 (2017): 4-18
趣味：絵をみること

変動する現代社会において大学がもちうる意義

新たに東京大学の公文書館として位置づけ直された文書館の整備と、高校生たちに大学で学ぶことの意義を理解してもらいギアチェンジを円滑に行うための活動を核としてきた高大接続研究開発センターの充実、および創立150年記念まで10年を切った周年事業を企画・推進する体制づくりの担当として、大学執行役・副学長に補任されました。

文書館は、もともと100周年記念事業のひとつであった『東京大学百年史』の編纂刊行の「遺産」ともいべき資料群から育ってきたアーカイブですが、電子化とインターネットの時代になって、「文書」の意義それ自体が大きく変容しつつあるように思います。しかし歴史を踏まえて、よりよい未来を選ぶとすると、かつ

ての現実を物語る多様な資料は正しく保存され、豊かに活用されなければならないでしょう。

さらにまた、大学という学術創成の組織が、変動する現代社会において持ちうる意味は、だれよりも未来を担う高校生たちに見え、響くものをもつ必要があるとも思います。そのことを考えるなら、「高大接続」ということばの拡がりもまた、描き直されなければならないのかもしれない。

それぞれの社会の現代と向かい合って、観察と実証とを軸に研究の方法論を発展させてきた社会学のなかで、ときに周縁領域と思われがちだった歴史や文化を探究してきました。その研究者としての経験をもとに、微力ながら東京大学のために貢献できたらと思います。

大学執行役・副学長

佐藤健二

Kenji Sato



昭和54年3月 本学文学部卒業
昭和58年3月 本学大学院社会学研究科博士課程中途退学
昭和58年4月 本学教養学部助手
昭和61年4月 法政大学社会学部専任講師
昭和63年4月 法政大学社会学部助教授
平成6年10月 東京大学文学部助教授
平成17年3月 博士（社会学）学位取得
平成17年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
平成23年4月 同 副研究科長
平成29年4月 同 研究科長・文学部長
専門分野：歴史社会学・文化社会学
研究内容：1) 佐藤健二「柳田国男の歴史社会学：続・読書空間の近代」せりか書房、2015年 2) 佐藤健二「ケータイ化する日本語：モバイル時代の“感じる”“伝える”“考える”」大修館書店、2012年
趣味：余り物で料理をし、残り物で論文を書くこと

大学と社会との新しい連携の推進を目指して

このたび渉外・産学協創担当の副学長を拝命いたしました。昨年の組織改変により新たに設けられました社会連携本部の副本部長を務めさせていただきます。

大学は知を生み出し、知の実践を担う人材を育てる社会的使命があります。近年は、知の高度化、複雑化が急速に進んでいるため、大学の「社会との連携」がより一層重要視され、それを担う組織の拡充が必要となっております。

わが国の研究開発費の政府負担割合は主要国の中では低く、大学においても研究費を公的資金だけでは賄いきれません。今後は、産学が連携して資金と人材を確保する諸方策を駆使し、新しい価値を生み出していく基礎・応用研究拡充の重要性がますます高まると思われます。

これまで私は、長年、レアメタルをはじめとする非鉄産業と様々な産学連携活動を行ってきました。最近では、大学の部局と企業との包括的な連携研究の仕組みづくりや、若手教員の産学連携活動をプロモートするお手伝いなどにも取り組んでおります。また、本学の諸活動を世界規模で展開するために設置された東京大学ニューヨークオフィスの開設のお手伝いもしました。これらの経験を活かし、本学の社会連携の推進に寄与できればと考えております。

私一人ができることは限られておりますが、大学を取り巻く人的ネットワークを充実させ、大学が国内外の企業等と連携して社会に大きく役立つ新たな仕組みづくりに少しでも貢献できれば幸いです。

副学長

岡部 徹

Toru H. Okabe



昭和63年3月 京都大学工学部冶金学科卒業
平成2年3月 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
平成5年3月 同 博士課程修了 博士（工学）
平成5年5月 日本学術振興会海外特別研究員／マサチューセッツ工科大学博士研究員
平成7年10月 東北大学素材工学研究所・助手（現：多元物質科学研究所）
平成13年1月 本学生産技術研究所助教授
平成21年1月 同 教授
平成26年4月 本学総長補佐
平成27年4月 本学生産技術研究所・副所長
専門分野：材料化学、環境科学、レアメタルプロセス工学
研究内容：“プロセス技術がレアメタルをコモンメタルに変える”ことを夢見て、チタンなどの新製錬技術の開発を行っている。最近では、PGM（白金族金属）、レアアース（希土類金属）、タンタル、タングステン、レニウムなどのレアメタルの製造プロセスや新規リサイクル技術、環境技術の研究も行っている。
趣味：野外活動（アウトドアライフ）、イモリの飼育



地域と卒業生が東大を動かす

このたび社会連携（地域連携、渉外・卒業生、復興支援）担当副学長を拝命しました。少々荷が重いというのが正直なところですが、誠心誠意努めさせていただきます。

東京大学は第3期中期計画の3類型において「世界の有力大学に伍して卓越した研究教育を行う大学」であり、地域連携が戦略の柱として明示的に位置づけられたのは比較的新しく2017年の指定国立大学構想調書です。改組された社会連携本部および大沢真理大学執行役・副学長のもと、その体制や活動が整備されてきましたが、まだまだ十分とは言えません。東京大学は社会変革を駆動することを目標として掲げており、その視野の先にはSociety 5.0やデー

タ駆動型社会があります。これらの社会変革を実現するためには大規模な情報インフラ、それを有効に活用する技術開発、法的整備などが必要ですが、それだけで、包摂的な社会が実現するとは思えません。一方、地域連携は、地域の人々の生活や表情を見て進めていく学問であり社会実装だと思っています。東京大学が目指す社会変革を包摂的で人々を幸福にするものにするためには、市民の目線に立った地域連携を東京大学の駆動輪の一つとすべきだと考えています。

何ができるか自信はないのですが、とりえず、卒業生イベントも含めなるべく多くの現場を体験したいと思っています。お声がけをしていただければ幸いです。10年後に、地域連携や卒業生が東大を変えたと言われることが目標です。

近年では大型設備を使用する試験研究や広いフィールドを使用する実験施設を備えています。

また、「東京大学ビジョン2020」におけるアクション4の⑥においては、「3極構造を基盤とした連携の強化」が謳われており、その具体的取組みとして産学官民協働拠点形成のハブ拠点としてつくばー柏ー本郷イノベーションコリドー構想を推進する他、本学の指定国立大学法人構想調書に記載されている「知識集約型産業集積形成のためのネットワークインフラを強化する拠点整備」の実現を目指すデータプラットフォーム構想が着実に進展しています。

これらの事業が円滑に推進・実現されますよう微力ではありますが尽力して参る所存です。皆様方からのご指導とご支援を賜りますよう、宜しく願い

模は法人化直後の1.7倍にまで拡大し、臨床研究中核病院・がんゲノム医療中核拠点病院の指定等その機能をますます発展させています。

一方、医療費適正化の社会的要請から在院日数を短縮し、急性期医療の効率化を進める中で、保険請求の構造上、増収減益傾向が顕著となり拡大均衡だけでは病院経営は不可能となっています。今後も、安全で高度な医療を実践し、最先端の研究と高度な医療人を育成するため、先進設備の更新も可能とする新たな財源の確保計画が必要となっています。

五神総長のもと「財源の多様化」と「運営から経営へ」と進む、東京大学の中において大学病院は、その最先端を進む使命がある事を認識し、微力では

多様化、高度化、専門化が進むことになりました。

また、東京大学におきましても、ビジョン2020のもとで、価値創造の源泉である教育・研究環境を充実させることに加え、変革し続ける時代に対応し、その先を見据えて世界、社会に貢献していくという目標に沿って経営を推し進めているところで。

このことから、大学の経営にとって重要な財源を効果的に活用するための一役を担う経理・調達業務においては、国内外の情勢に対して目を向け、新たな課題に迅速に対応できる体制を整えていくことが重要と考えています。

なお、膨大な情報が溢れている状況においては、皆様方のお知恵やご意見も拝借できることがさらな

副学長

津田 敦

Atsushi Tsuda



昭和57年3月 北海道大学水産学部卒業
昭和59年3月 本学大学院農学研究科修士課程修了
昭和62年3月 本学大学院農学研究科博士課程修了、農学博士
昭和63年11月 本学海洋研究所助手
平成8年4月 水産庁北海道区水産研究所室長
平成15年4月 本学海洋研究所助教授
平成23年4月 本学大気海洋研究所教授
平成25年4月 本学総長補佐
平成27年4月 本学大気海洋研究所所長
専門分野：生物海洋学
研究内容：1) Tsuda, Atsushi 他25名 "A mesoscale iron enrichment in the western subarctic Pacific induces large centric diatom bloom." *Science* 300 (2003): 958-961.
趣味：バードウォッチング

副理事

稲垣 博明

Hiroaki Inagaki



昭和52年5月 富山大学採用
昭和55年4月 東京大学
平成15年4月 岩手大学入試課長
平成16年10月 東京学芸大学経理課長
平成17年9月 東京学芸大学企画課長
平成20年4月 本学生産技術研究所経理課長
平成23年4月 本学数物連携宇宙研究機構事務長
平成24年4月 本学カブリ数物連携宇宙研究機構事務長
平成27年7月 本学情報システム部長
平成29年4月 本学工学系・情報理工学系等事務部長
趣味：田園スポーツ、ラジオ体操

申し上げます。

副理事

塩崎 英司

Eiji Shiozaki



昭和59年4月 香川医科大学入職
平成17年10月 東京大学病院経営戦略課長
平成22年4月 千葉大学病院総務課長
平成24年4月 名古屋大学病院事務部長
平成27年4月 東京大学病院事務部長 国立大病院事務部長会議総務委員長
趣味：アウトドア活動

ありますが日本を代表する大学病院を支えるため全力で取り組んでまいります。一層の御支援を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

副理事

戸張 勝之

Masayuki Tobari



昭和58年4月 山梨医科大学採用
昭和60年4月 東京工業大学総合理工学研究所等事務部長
平成2年4月 本学経理部
平成17年4月 東京海洋大学財務部財務課課長補佐
平成19年4月 本学財務部財務課副課長
平成23年4月 本学地産研究所事務長
平成27年4月 本学医学部・医学系研究科事務長
平成29年4月 本学理学部・理学系研究科等事務部長
趣味：バドミントン、登山（中級）

る効率化、柔軟化が図れることになると思いますので、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

共にあゆむ柏地区キャンパス

このたび、柏地区整備、イノベーションコリドー担当副理事および柏地区事務機構長を拝命いたしました稲垣でございます。

東京大学キャンパスは長年に亘る学問の発展、教育・研究活動の展開を反映し現在に至っており、本郷地区キャンパスと駒場地区キャンパスに柏地区キャンパスを加えた3キャンパスを中核とする3極構造をキャンパス計画の基幹構造として位置づけ計画・整備されてまいりました。なかでも柏地区キャンパスは柏キャンパス、柏Ⅱキャンパスと、これらと連携する柏の葉駅前キャンパスから構成され、学融合、先端科学、国際キャンパスを理念として整備・発展し、

日本を代表する大学病院として

このたび病院担当として副理事を拝命いたしました塩崎です。

教育研究診療を担う大学病院は、医療法上の特定機能病院として高度医療の提供、高度医療技術開発・評価並びに高度医療に関する研修を実施する能力を備え、それにふさわしい人員配置、構造設備等を有することが求められています。また、本学はじめ多くの国立大学病院は、法人化の利点を活かし自己資金である病院収益の増収によって設備を更新し、優秀な人材を確保して高度先進医療の体制を拡充してきました。この結果、現在国立大学病院の予算規

経営に根ざした業務を目指して

このたび、経理・調達担当の副理事を拝命いたしました戸張でございます。

私が平成2年4月、本学の経理部契約課に配属となり、初めて担当した業務が物品の調達でありました。その後、予算業務等の他分野の業務に携わり、27年という歳月が経ち、再び本業務に携われるということに不思議な縁を感じているところで。

この間、世界は大きな変革期を迎え、国立大学におきましても特に法人化を契機として、変革していくことになりました。情報社会の発展に伴いインターネットが普及し、経理・調達業務におきましても

退任の挨拶

このたび退任された理事・副学長、大学執行役・副学長、副理事の挨拶を掲載します。

退任にあたって—国立大学は何をすべきところか

2015年4月から4年間にわたって務めてきた理事・副学長の職をこのほど退くことになりました。この間、総長はじめ役員、大学執行役、副学長の皆様方、部局長や総長補佐の先生方、そして本部職員の皆様方にはひとかたならぬお世話になりました。心より感謝申し上げます。

理事在任中は、「国立大学は何をすべきところか」ということをずっと考え続けて参りました。

た。法人化以降の流れで「運営から経営へ」の転換が進む一方、自立した「学問の府」としての大学の存在感が全国的に後退しつつあるように感じるのは、私が古い文系人間であるがゆえの杞憂でしょうか。

しかし東大は「国立」大学であって、「国策」大学ではありません。そして本学が掲げて立つところの「国」とは、あくまでも国民全体のことで

前理事・副学長 **石井洋二郎**

あるはずです。もし国策に疑問があれば、率直に議論を戦わせ、誤りがあれば毅然としてこれを糾すことが国立大学に託された本来の使命でしょう。

東京大学がアカデミアとしての良識と揺るがぬ矜持の念をもってその使命を果たし続けること、そして知的興奮と感動に満ち溢れたキャンパスから、未来を切り拓くすぐれた学生たちを世に送り出し続けることを願ってやみません。

手探りで進めた前例のない試みの数々

2015年4月から副学長、大学執行役・副学長、理事・副学長を合わせて4年間務め、この間、研究、施設、教員人事、産学協創、大学院教育改革、EMP、イノベーションコリドーなどを担当いたしました。教員ポストやスペースの透明化、それに基づく採用可能数の再配分システムの改革、施設の維持管理のカルテ作成などは、

いずれも初の試みで、すべての部局のご理解とご協力をいただき実現できたものです。これらに加えて、URA制度、ラウンドテーブルを中心とした組織—組織の産学協創、現在16プログラムが推進されている国際卓越大学院など、ビジョン2020の中核となる制度の構築や事業に取り組みましたが、どれも前例がなく手探り

前理事・副学長 **小関敏彦**

で進めたところもあり、その過程で多くの方にご助言・ご支援いただきました。忙しい4年間でしたが、多くの方に助けられ、多くの方と共に担当業務を進めることができ感謝しております。これらの仕組みや制度が定着し、指定国立大学として東京大学がさらに発展されることを祈念しております。

異なる状況から多くを学ぶ

2018年度に地域連携・文書館・（創立150）周年対応方針を担当しました。

近年、本学の学生・院生および教員の出身地は、首都圏に集中する傾向があります。本学は指定国立大学として、諸地域の課題解決を担う人材の育成を重視していますが、それは同時に、本学の構成員が、「普通」だと思いがちな環境とは

異なる状況から、多くを学ぶ機会ともなります。

文書館は法律の指定を受けて、大学役職員が職務上作成し組織的に用いる文書のうち歴史的に重要なものを保存し、また本学の歴史に関わる多様な資料等を収集し、整理して公開しています。文書館と周年対応はともに、けっして平坦ではなかった本学の創立以来の歴史に学ぶた

前大学執行役・副学長 **大沢真理**

めの基盤を提供しており、組織的な位置を昨年度に固めました。近い過去であっても状況は驚くほど異なることが多く、そこに学ぶことで将来に向けた創造力が養われます。

本格的な地域連携、文書館や周年対応の充実を通じて、本学が発展していくことに期待します。

副理事としての5年6ヶ月

平成25年10月より5年6ヶ月の間、副理事として男女共同参画、業務改革推進、調達・経理、文書館、年史編纂業務を担当させていただきました。この3月末を持ちまして退任いたしました。この間、濱田前総長、五神総長はじめ役員の皆様、関係の皆様方にご指導、ご支援いただき職責を努めることができました。退任するにあたり心から感謝申し上げます。

特にこの二年間は、文書館の組織のあり方、年史編纂体制の全学的な位置づけなどの業務を担当させていただき、この4月からそれぞれ組織形態が全学組織として位置づけられ活動を発展的に継続しております。今後とも更なるご理解、ご支援をお願いしたいと思います。

在任中、何れの担当業務におきましても総長補佐の先生方をはじめとして多様な分野の先生

前副理事 **紺野鉄二**

方からご指導、ご支援いただき、教職協働という形で業務を遂行させていただきましたことは、私自身にとっては大変有意義で貴重な経験をさせていただいたと思っております。これまでいただいたご指導、ご厚情に重ねて感謝申し上げます。退任のご挨拶とさせていただきます。

職務に関わった学生と教職協働する喜び

本年3月末をもちまして、副理事を退任いたしました。在任中は、各方面からひとかたならぬご支援、ご助力を賜りましたことに、深謝いたします。

2013年10月、当時の濱田純一総長から、学部教育の総合的改革に関わる教養教育改革担当、兼・教養学部等事務部長を拝命いたしました。2015年4月には、五神真総長から、「東京大

学ビジョン2020」達成に向けて、スポーツ先端科学研究振興、広報戦略、駒場キャンパス整備、文化資産管理担当のご下命を受けました。それぞれの所管の課題解決にあたりまして、多くの教員、職員から絶大な支援・助言を賜りましたことを改めて御礼申し上げます。

採用されて間もなく配置された教育支援系の職務に関わった大学院生が、相当の時を経て、

前副理事 **関谷孝**

教員となり、期せずして同じ方向を目指して教育行政に関わるということが幾度ありました。副理事在任中にも、同様のまさに教職協働の場面が何度もあり、しみじみとした感慨を覚えたことが思い出されます。

今後とも、ビジョン2020に掲げた基本理念「卓越性と多様性の相互連環」を推進して本学が益々発展していくことを祈念いたします。



平成30年度卒業式



平成30年度卒業式が、3月26日(火)に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部(理系学部)と第二部(文系学部)に分けて行われ、第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」より第一楽章の演奏後、総長をはじめ、来賓の方々、理事・副学長、理事、各学部長がアカデミック・ガ

ウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各学部の卒業生代表に、順次、学位記が授与され、卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代(第一部:工学部 金田 真悟(かねた しんご)さん、第二部:文学部 依田 遥香(よだ はるか)さん)から答辞が述べられ、式を終えました。

総長告辞



五神 真

本日ここに学士の学位を取得し、卒業式を迎えられた10学部、3,017名の卒業生のみなさんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。また、この日にいたるまで、長い年月、みなさんの成長を支えてこられたご家族の皆様方のご苦労に対し、敬意と感謝の意を表します。本学が送り出した卒業生は、みなさんを含め合計286,106名となりました。1989年1月に始まった平成という時代が今、幕を閉じようとしています。みなさんは平成最後の卒業生として、本学を巣立つことになります。

直近の4年間 —— かつてない変化の時

今からちょうど4年前の2015年4月、私は東京大学総長として初めての入学式に臨みました。みなさんの多くも新入生として、同じ式に出席されていたと思います。その席で私がみなさんに伝えたメッセージの中に、「多様性を活力とした協働」という言葉がありました。覚えているでしょうか。

それから僅か4年の間に、世界は大きく変わりました。その変化の様相は、これまでの

私の時代感覚とは全く異なるもので、経験したことのない大きな変動であると実感しています。そのうえで、「多様性を活力とした協働」は4年前とは比べ物にならないほど重要になったという思いを強くしています。本日は、私がなぜ、今そのように思うのか、そして東京大学卒業生となるみなさんに何を期待するのかを、是非お話ししたいと思います。

まず、世界の変化がかつてないほど大きなものなのかどうか、ということについて、イギリスとアメリカの政治情勢を例に考えてみましょう。ご存じの通りイギリスは2016年の国民投票によってヨーロッパ連合(EU)離脱を決定しました。ヨーロッパの諸国は長い紛争の歴史を経て、ようやく統合というビジョンに到達したのです。イギリスの決定はその挫折を意味するものです。しかし、これを受けて立案された、イギリス政府の離脱への法案は、2019年初めの国会において大差で否決されてしまいました。その後、解決の方向性が見えないままに推移しています。他方、2016年のアメリカ大統領選挙も、大方の予想を超えた波乱含みの展開でした。その影響は、いっそう大きな不安定性を伴って、今も続いています。何よりも深刻なことは、これらの事例が、人類社会が長い時間をかけてつくりあげてきた民主主義の理念への信頼そのものを揺るがしているということです。人類社会を調和を保ちながら発展させる為に、これからどうすれば良いのか、緊張のもとで真剣な議論が必要になっているのです。

これらの現象を注意深く眺めると、そこには共通の特徴があることがわかります。世論の動向がかつてないほど短い間に、かつてない勢いをもって一方向に流れやすくなっていること、そしてその流れは移りやすくて、極めて不安定になっているということです。

デジタル革命の進展と サイバー・カスケード

このように、人々の意見の大きな流れが瞬時に形成されたり、それが急激に方向転換したりすることの背景には、デジタル革命とも呼ばれる近年の急速な技術革新があります。さまざまな情報がデジタル化され、インターネットで繋がれたサイバー空間の上に蓄積され続けます。一方で、新しい技術をビジネスに結びつけた新たな企業が次々に誕生し、それらが提供するサービスはあつという間に広がります。私達は物理空間、すなわちリアルな世界で生きていますが、日々の暮らしの中でサイバー空間上の情報を参照しながら活動するようになってきています。この物理空間とサイバー空間の融合は、人々の生活だけでなく、人と人の繋がりが、そして社会の形をも大きく変えつつあるのです。

インターネットは地域や国を超えて、自由で開かれたコミュニケーションの場を提供する画期的な技術です。しかし、一方で新たな危険も目立つようになりました。人を深く傷つけ、命を奪ってしまうということすらおきています。ネット上ではフェイクニュースが

瞬く間に拡散し、偏った意見が大きな影響力を持つことがあります。こうした現象は、しばしば「サイバー・カスケード」と呼ばれます。カスケードとは、階段のように連なった滝を意味します。つまり、サイバー空間上で特定の情報が滝のように流れを増して多くの人々に伝播し、心理や行動の連鎖をもたらす新たな社会現象です。インターネットは、一見すると多種多様な情報が漂う広い海のように感じます。しかし、インターネットはその中から自らと似た関心や考えを持つ人々だけを見つけ出し、互いに容易に結びつくことを可能にする環境でもあります。さらにいったん情報が拡散され始めると、指数関数的に加速しながら増殖し広がっていきます。その広がりの中にいる人は、自らが圧倒的な多数派であるという感覚を抱くことになりがちです。インターネットのこのような特性には、小さいけれども大切な気づきがあったとき、それを広く人々に伝えることができるというポジティブな面もあります。しかし同時に大きな危険もあるのです。サイバー空間上で多数派のように感じるのが、実世界と大きく乖離し、社会の真実の姿を見失ってしまうという大きなリスクをはらんでいるのです。しかも、政治や経済に影響を及ぼすような場面で、それが作為的に利用される危険性もあるのです。実際、最近の世界情勢を見渡すと、何が真実かよりも、何が多くの人々の感情を揺さぶるかということがより重要視されているように感じます。まさに「ポスト・トゥルース」時代に突入してしまったと言えるのかもしれません。そしてこうした風潮は、安易な多数派偏重を生みます。これは、少数意見の声に耳を傾け、多様性を尊重し、皆で結論を導き出すという、民主主義の本来の理念に反するものです。

ここでは、みなさんの先輩である見田宗介先生の優れた論考を手掛かりにして、多様性を尊重することの重要性を改めて考えてみたいと思います。

『まなざしの地獄』にみる多数派偏重の罪深さ

見田宗介先生は1965年から1998年まで本学教養学部で社会学を教えていました。新しい社会調査の技法がアメリカから輸入され、大学でも新聞社でも、人々の意識を調べようと世論調査が熱心に行われるようになりました。そうしたなかで見田先生は、ご自身の言

葉を借りれば「一人の人生と社会構造とのつながりを捉える」という独自の社会学を目指したのです。その最初の試みが、1973年に発表された『まなざしの地獄』という論考で、大きな注目を浴びました。見田先生は、市民4名を連続して射殺するという1960年代の終わりの凶悪事件と向き合い、犯人である少年が獄中で書いた手記を手掛かりにしながら、徹底した事例分析を行いました。この犯行に及んだ少年は、論考の中ではN・Nというイニシャルで表現されていますので、ここでもそう呼ぶことにしましょう。

N・Nは中学卒業後の1965年に、集団就職の一員として東北の地から上京しました。彼のように地方の中学や高校を卒業して東京やその近県に就職した若者は、この年だけで11万人を超えています。当時、日本はまさに高度経済成長のまっただ中で、彼らは「金の卵」と呼ばれ、多くの企業から引く手あまたで歓迎されました。彼ら自身も、地方での貧困や閉塞感から抜け出せることに希望を抱き、大都市に足を踏み入れたのです。しかし、その若者たちとそれを受け入れる都市の間には、大きなすれ違いが潜んでいました。都市が要求し歓迎したのは、解放と幸せを夢見る一人一人の若者ではなく、安価で新鮮な大量の労働力だったのです。N・Nはやがて、自らに向けられた都会の人々の視線、まなざしの冷やかさと、その人々の目に映ったまま変えることができない自らの出身や経歴に気づき、強い疎外感と攻撃性を抱くことになりました。

そして、N・Nは充実感を得られないまま転職を繰り返し、絶望の果てに凶悪事件を起こしてしまいます。この事態そのものは、もちろん極めて異例です。しかし、この時期、希望に満ちて大都市東京に流入した多くの若者が、彼ほど際立った形ではないにせよ、本質的には彼と同じ生きづらさと孤独を経験したことは事実だったのです。

デジタル化時代のまなざしの地獄

見田先生が取り上げた事例から半世紀が経

過していますが、そこで浮き彫りにした格差社会の構造は、私たちが生きる今の社会にも実は横たわっています。優位な多数派の側に立つ人々が、異質な少数の他者に対して半ば無自覚に排他的な目を向けてしまうという構図は、現代においても珍しいものではありません。

さらに、現代において、異質な他者に向けられる人々のまなざしには、N・Nの時代よりもはるかに強い衝撃と影響力が加わっています。というのも、N・Nが強く意識し恐れた人々の評価は、基本的には彼が直接に出会った職場やその周辺に限られていました。しかし現代においては、直接に会うことのない幾多の見知らぬ人々の目が、あつという間に特定のターゲットに向けられます。SNS利用者のコミュニケーションの場に突如として生じる「炎上」という現象は、サイバー・カスケードのネガティブな帰結の典型で、現代の深刻な社会問題というべきものです。

私たちは、ついつい自分が主流派・多数派に属していると思いつくことで安心を得ようとし、翻って、自分と異なる他者に対しては「変わり者」や「異端」のレッテルを貼りがちです。一方で、多数派に属しているつもりだった自分が、何かのはずみで突然「異端」の側に立たされてしまうという事態が、いとも簡単に起こりえるのです。だからこそ、多様性を尊重することの重要性を、常に強く意識しなければならないのです。

個人の内的多様性に目を向ける／極端な事例から全体を知る

見田先生はたった一人の極めて例外的な若者の半生を分析したのですが、私はその研究から、二つの大切なことを学ぶことができると思います。

その一つは、私たち自身誰もが、異質性によって排除される他者の立場になり得るということであり、逆に異質に見える他者の誰もが、じつは互いに共通する側面をもって、同じ社会の一員になり得るのだということです。見田先生はN・Nの手記を目にして「これはありえたかもしれない自分だ」と強く共





鳴したといいます。犯罪者としての彼との見かけの違いを乗り越えて、子ども時代の貧しさ、家族への反発と上京、世間の偏見への怒りなどについて、手記を真摯に読み解いていきます。そこで、その人が抱えこんでいる人間としてのさまざまな側面、すなわち、「内なる多様性」にたどり着くのです。それに目を向けることこそが、自己と他者との深い相互理解を可能にし、多様性を尊重するということなのです。

もう一つの大切な点は、個別的で例外的な事例であっても、注意深く目を凝らせば、そこにも全体を語る力があるということです。現代社会はグローバルな広がりを持ち、関わりのあるすべての人の意見や態度を直接見聞きすることなど到底できません。しかし、諦めてはいけません。むしろそこで、身近な少数の人の考えをとことん聴き、共感し議論を交わすべきなのです。それを通じて、より広い社会の人々の動向を理解するための重要なヒントを得ることができるからです。

現代では、より大規模なデータを扱うことは格段に容易になりました。しかし、データがいくら大きくても、十分な吟味なく表層的に抽出した、多数とか平均といった結論は、社会的に捉えたものにはなり得ません。むしろ、自分が「この人なら」と思える友人や同僚、先輩ととことん話をしてみ、その人が何を考え、どんな思いで行動しているのかを、じっくり聞くことの方が、得るものは大きいはずです。そこで自分の考えを伝え、議論を交わしてみることです。自分とよく似た人ではなく、違った意見や好みを持っている人と意識的に話すことがとても重要です。そうした他者との交流は、エネルギーの要ることかもしれませんが、必ずや、そのエネルギーに見合うものをお互いに得ることができるはずです。

ポスト平成社会における多様性尊重の意義

さて、『まなざしの地獄』の分析から45年を経た2018年、見田先生は『現代社会はどこに向かうか』という最新刊の中で、私たちが

この先向かうべき道筋について論じています。

高度成長期には、世界は無限でどこまでも発展し得るものとして捉えられ、資源はすべて目的を達成するための手段として使える、といういわば「手段主義的」な考え方が浸透していました。しかし今、私たちは地球温暖化や環境汚染、地域格差などの問題に直面し、世界が有限であることを切実に感じています。これからの私たちは、地球の有限性を前提としたうえで、人間の幸福とは何かという単純で素朴な問いに改めて取り組み、地球と人類社会を持続可能な形で発展させる道筋を求めて行かねばなりません。

その問いに取り組むうえで大切な規程が三つあると、見田先生は述べています。第一にpositiveであること。positiveとは、現在あるものをそのまま受容し承認することではありません。今は存在していないかもしれない、真に肯定できるものを前向きにつくり出していくということです。第二にdiverseであること、文字通り多様性を尊重することです。第三はconsummatoryであることです。見田先生は、これはとても良い言葉だが適切な日本語に置き換え難いと断りを入れたうえで、instrumental すなわち「手段的」「道具的」といった認識とは反対の境地だと論じています。それは、私達が行う現在の活動について、未来の目的のための手段として捉えるのではなく、活動それ自体を楽しみ、心を躍らせるためのものと捉えるということです。語源を探っていくと、con-は「ともに」という意味であり、summateは「足し合わせる」という意味ですから、ただ一人だけで楽しむということではありません。

まもなく「ポスト平成」の時代が幕を開けます。そこでは、誰もが同じ未来を見据え、同じ目的に向かって邁進することに迷いのなかった高度成長期とは違う生き方が求められるでしょう。一人一人が本当に心を躍らせることのできる理想を探し、その経験や感覚を大切にしながら、同時に他の人の楽しさをも尊重して生きていくべき時代です。みなさんには、たとえこの先、忙しさに追われがちな日々を送ろうとも、「自分は今、心躍らせる

ことのできる仕事や活動をしているのか」と自分に問うことを、是非忘れずにしてほしいと思います。

さらに、そのような問いかけを、自分のみならず、他の人にも投げかけ、ここでいうconsummatoryな感覚を分かちあってほしいと思います。自分も他者もそれぞれに、ともに心躍らせている、そのような質の高い「共感」こそが、新しい社会を望ましい方向に向かわせる推進力になると私は考えます。全員が一つの幸福に向かうのではなく、多様な幸福が共存し、緩やかに結合する。そうした社会のあり方を、まさにともに心躍らせる活動として模索してください。それが「多様性を活力とした協働」なのです。私はみなさんに、そのような活動を牽引する、新たな時代のリーダーになっていただきたいと願っています。

卒業後の交流のすすめ

今、この場集っているみなさんは、これまでの大学での学びの中で各々の専門の知識を得て、それぞれ異なる強みを身に着けているはずです。この先、大学院に進んでさらに学びを深める方、あるいは実社会のさまざまな分野で活動を始めの方々もいると思います。別々の道へと進むことで、みなさんの間の多様性はさらに増していきます。卒業後の長い人生において、同窓同期のネットワークは間違いなくみなさんの財産となります。どうかその財産を生かし、交流を続けてください。そしてもちろん、これから先に待っている新たな他者との出会いも大切にしてください。自分とは異なる視点を持つ他者と深いコミュニケーションを交わし、協働して新しい時代の課題に挑んでください。それこそが、みなさんが広い世界の舞台上で「知のプロフェッショナル」として貢献していくことに他ならないと、私は信じています。また、皆さんの知恵、これから社会で体得する知見は、東京大学をよりよくするための大切な資源です。よりよい教育と研究の環境を備えるために、卒業生だからこそできること、卒業生にしかできないことを、是非していただきたいのです。最後に、本日ここを卒業し巣立っていくみなさんが健康であり続けるとともに、これからも東京大学での体験を活かして不断に学び続け、希望に満ちた明るい未来を切り拓くことを祈念します。

本日は誠にありがとうございます。

答辞

(第一部)

工学部
金田真悟さん



本日は、諸先生方、ご来賓の方々をはじめ、多数の皆様の御臨席の下、このように盛大な式典を催して頂き、卒業生を代表致しまして心より御礼申し上げます。また、五神総長より告辞のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

私は三年前に、工業高等専門学校より東京大学工学部に編入学しました。通常の学生と異なり、前期教養学部を半年、工学部を二年間半過ごしました。中学校

卒業以来、工学の道を歩んできた私にとっては、前期教養学部は自分の興味の赴くまま、学問に触れる機会を与えてくれた素晴らしい時間でした。また、前期教養学部で出会った友人達は、みなそれぞれが自分の得意分野を持っており、雑誌一つですら有意義な知識を得ることができ貴重な時間でした。

後期課程では、それぞれが自分の興味、そして志の下、専門の道へと進んでいきました。私は、世界を技術で変えるという信念の下、工学部電気電子学科に進学しました。学科同期はみな、強い意志と大きな夢を持っており、日々互いを励まし合いながら勉学に励みました。卒業研究では、日常の電子機器を構成するナ

ノデバイスから革新をもたらすという意思の下、デバイスの研究を行いました。材料から吟味し作製していくデバイスは失敗の繰り返しで、教授や先輩方、同期からの助言や励ましは、私を強く支えてくれました。

昨今、日本を取り巻く社会情勢は日々、刻々と変化を続けており、昨日の当たり前は、今日も当たり前とは限らないくらい変化しています。その中で、科学は絶え間なく発展を続け、昨日までの常識を打ち破ることで今日の私たちの日常があります。私たちは、この四年間で得た知識・経験、そして志をもとに、先代が作り上げた昨日までの当たり前を、今日、今私たちが新たに打ち破っていくかなければ

なりません。四月から就職する者、研究の道に進む者、様々な進路があります。明日からの道は違えど、みなそれぞれの信念に従い、常識を打ち破り、次の時代を築いていくという使命を全うしていく所存であります。

最後になりましたが、今日まで御指導頂いた諸先生方、職員の皆様方、共に切磋琢磨した友人、先輩、後輩の皆様、そしていつも私たちを温かく見守り支えてくださった家族に、重ねて心より御礼を申し上げます。皆様のご健康と東京大学の更なる卓越を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

答辞

(第二部)

文学部
依田遥香さん



本日は、私たち卒業生のためにこのような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。ご多忙の折ご臨席いただきました多くの皆様は、卒業生一同心よりお礼申し上げます。また、ただいま五神総長よりご告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げます。

ただ「優しい人になるために」この大学の門を叩いた私は、どんな学問を学びたいのかもわからないまま、興味をもつ

た講義を手あたり次第受講しました。受ける講義を選ぶこと、何も強制されていない時間がたくさんあること、突然与えられた自由になんか困惑し、それを飼いならせるようになる必要がありました。私にとって前期教養学部生としての2年間は、「1人の人間として自由に生きる」ということを練習する時間であったように思います。その後進学した、文学部の哲学専修課程はまさに、「私の考えたいことを考えつづけられる環境」でした。自らの考えたいことを考えつづけるためには、それがいくつ困難であったとしても、自らの考えたことや感じたことを誠実に言葉にしようと努めること、言葉にできると信じることで、ただ自らの言葉を過信しないことが必要であると知

りました。自らが何を考えていて、どうありたいのかを言葉にするという営みはいつも、私の話を一生懸命聴いてくださる人たちの支えがあって成り立っていました。私が考えたい、考えつづけたいと思ったことをそのまま尊重し、かつより綿密に言葉にすることを助けてくださった先生方に支えられ、私と同じように、自分がどうありたいのか、どうあるべきなのか一生懸命考え、またお互いに話し聴くことで刺激あった友人たちに支えられました。初めて、心から尊敬し、この人には適わないと思えるような人たちに会えることができました。

今日私たちは東京大学を卒業し、それが選択した道を歩き始めます。それ

がどのような道であったとしても、私たちがこの大学で過ごした日々とその意味は決して消えることはありません。大学生として自由な立場で過ごす時間すべてが、自分を知り、自分がどうありたいのかを考えつづける時間になりました。そしてここは、わからなくても考えつづけることを応援してくれる場所であり、いくら難しくても考えることをやめてはならないということを教えてくれる場所でした。

最後となりましたが、これまでの学生生活を支えてくださったすべての皆さま、いつも私の選択を尊重し支えつづけてくれた両親に心より感謝し、また東京大学のますますの発展を祈念して答辞とさせていただきます。

平成30年度学位記授与式



平成30年度学位記授与式が、3月25日(月)に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部と第二部に分けて行われ、第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント 二長調 K.136」より第一楽章の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガ

ウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記が授与され、修了生に告辞が述べられた後、修了生総代(第一部：法政政治学研究科博士課程 小谷(福井)利恵(こたに(ふくい)りえ)さん、第二部：医学系研究科博士課程 Moe Moe Thandar (モー モー タンダー)さん)から答辞が述べられ、式を終えました。

総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられた皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。本年度は、修士課程3,082名、博士課程1,103名、専門職学位課程301名、合計で4,486名の方々が学位を取得されました。そのうち留学生は936名です。これまで長きにわたり、学業に打ち込む皆さんを物心ともに支え、この晴れの日をともに迎えておられるご家族、ご友人の方々にも、お祝いとともに、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

皆さんは、本日、学位記を手になされ、東京大学で学問に取り組んだ日々を振り返り、様々な感動あるいは苦労を思い起こしていることと思います。皆さんはこれから、さらに大きな変化に出会うことでしょう。そのとき、東京大学での経験を糧として、変化に怯むことなく、むしろそれを好機と捉えて、存分に楽しみ、前に進んで頂きたいのです。

平成の最後から、新しい未来へ

さて、私が東京大学総長に就任してほぼ4年が経過しました。この4年間を振り返ると、世の中がかつて無いスピードで変化するようになり、これまでと異質な転換がおきつつあるのではないかと感じます。その背景にあるのが、サイバー空間の拡大です。私たちがインターネットを日常的に利用するようになってから既に20年ほどになりますが、この間に、様々なデータがデジタル化されサイバー空間に蓄積され続けてきました。特に、高度なセンシング技術や、半導体メモリなどの飛躍的な進歩によって、膨大なデータの収集や保存が容易になりました。そして今、人工知能技術やビッグデータ解析によって、そのデータを様々な形で活用できるようになっています。こうした技術革新は、私達の日常にも急速に入り込んでいます。これは「デジタル革命」とも呼ばれ、社会や産業にも大きな変化をもたらしています。これまで、自動化や大規模化によって、労働集約的な生産現場の資本集約化を進め、成長を達成して来ましたが、しかし、この成長モデルは終わりを告げています。第1次、第2次、第3次産業の領域を問わず、あらゆる場面で「スマート化」が進んでいます。そしてこうした流れの中で経済的な価値の中心が、モノから知恵や情報へとシフトし

つつあります。今、これまでの延長上にはない、新しいモデルへの不連続な転換、すなわちパラダイムシフトが起きつつあるのです。知識集約型社会へのパラダイムシフトです。

デジタル技術によって、散在していた様々なデータがサイバー空間に蓄積され、それらが関連づけられ繋がります。サイバー空間を実際の物理空間と融合させつつ、データをうまく活用する中で、若者男女、障害のあるなしなど、様々な制約を乗り越えて、すべての人々が参加し、活き活きと活躍できる社会、すなわちインクルーシブな社会を実現できる可能性があります。地方と都市の格差や高齢化など現代社会が抱える様々な課題が解消され、より良い社会が実現するというシナリオです。

しかし、デジタル革命は必ずしも、より良い社会を建設するというシナリオへ我々を導くとは限りません。世界中のデータが一部の企業や国家に独占され、データを持つ者と持たざる者の間に決定的な断絶や格差が生まれ、悪いシナリオへと陥る危険もあります。どちらに向かうのか、人類は、今、まさに分水嶺に立っているのです。我々は、互いに知恵を出し合い、協力し、より良い未来を選び取るのだということを意識して行動していかなければなりません。

知のプロフェッショナル

このような状況において、大学の使命や学問の役割は質的にも大きく変わりつつあります。それを端的に示す例が、大学と産業界との関わり方の変化です。東京大学では、これまでも産業界との共同研究が多数行われて来ましたが、その多くは、企業の開発現場における様々な問題解決に関して、大学と企業が協力するというものでした。

しかしながら、そうした従来型の産学連携では、いまは不十分になってきています。パラダイムシフトが進む中、予め提示された問題を協働して解決するだけではなく、時代の課題と向き合いながら、何を解くべきかという問いそのものを検討し直し、共に考え協力して取り組むことが必要になっています。そのために東京大学では、「産学協創」と名付けた新しい形の連携を始めとしています。知識に関わる大学と、経済活動に携わる企業とが手を取り合い能動的に論じ合うことで、新たな知を創り出すことはもとより、その知を確実に社会に拡げ浸透させていくことが可能になるのです。

学問を担っていくという大学本来の役割と、

社会を良くするために大学が担うことになる新たな使命とは、決して対立するものではありません。東京大学は、一昨年、創立140周年を迎えました。そこで次の70年を「UTokyo 3.0」と名付け、今、大きく飛躍しようとしています。平成最後の年に学位を取得される皆さんはまさにその歴史的な転換点に立ち会っているのです。

知はそれを活用し、新しい社会を創る担い手がいて初めて意味を持ちます。私は、知を創造し、知をもって人類社会に貢献する人材を「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。皆さんが今日手にした学位は、まさにその資格を意味します。資格を得たということは、同時に責任を負ったということでもあります。これまでの努力に誇りを持つと同時に、社会から期待される役割を自覚して、謙虚で誠実であり続けることを忘れず、常に前に向かい、挑戦を続けてください。

本庶佑先生と免疫研究

では、「知のプロフェッショナル」としてさらなる研鑽を積んでいくうえで、どのように社会や学問と向き合っていけばよいのでしょうか。そのヒントとして、「知のプロフェッショナル」の先達の例を紹介したいと思います。

昨年、日本の研究者がノーベル賞を受賞するという嬉しいニュースがありました。免疫学の本庶佑京都大学特別教授です。18世紀の英国におけるジェンナーの種痘法の開発に端を発する免疫学は、ベーリング-北里柴三郎によるジフテリアの抗毒素療法の発明など、たえずヒトの病気とのかかわり合いの中で発展し、人類に貢献してきました。

本庶先生は、米国から帰国した1974年より5年間、本学医学部の助手として教育研究に従事されました。先生は、日本で研究を開始するにあたり何をテーマにするか大いに悩んだといいます。そして「どうせやるなら一番やりたいことをやろう」との思いで、免疫の多様性の仕組みを解明するという大きな課題に真っ正面から取り組むことに決めます。免疫システムとは、体に侵入した細菌やウイルスなどの抗原とよばれる異物が侵入した際に、その異物に応じた抗体と呼ばれるタンパク質を生み出して自己を防御する仕組みです。ありふれた細菌などから自然界に存在しないものまで、侵入物は多種多様です。それを抗原と認識し、それぞれに固有の抗体を作り出すのです。その仕組みは、物理学者の私からすると、とても不思議です。この免疫系の驚くべき多様

性は、長年の謎とされてきました。本庶先生は、助手時代に当時開発されつつあった分子生物学の技術をいち早くもちいて、抗体の遺伝子解析に取り組み、免疫の多様性の仕組みの解明に関する画期的な研究成果を次々あげます。

今回のノーベル生理学・医学賞の受賞対象となったPD-1分子の研究も、もともとは、好奇心からはじまった純粋な基礎研究でした。1990年代にPD-1分子が本庶研究室で発見された後も、しばらくはその重要性は未知数でした。免疫システムの中でPD-1の果たす役割は、すぐにはわからなかったのです。しかし本庶先生はずっと諦めることなく、様々な実験の試行錯誤を繰り返します。そしてついにPD-1を欠いたマウスについて、免疫系の作用が過剰になり、自分の正常な細胞や組織に対してまで攻撃してしまう自己免疫性疾患を発症するというところをつきとめました。すなわちPD-1は免疫の応答を抑えるブレーキ役を担っていたのです。そこから本庶先生は、そのPD-1をコントロールして免疫のブレーキをはずすことができれば、がんの治療に応用できるのではないかと考えていきます。これは、当時まず無理であろうと思われていた癌の免疫療法です。本庶先生はこの仮説をもとに、最終的に画期的な新薬の開発にまでたどりつきます。手術、抗がん剤、放射線治療につぐ第4のがん治療法としての免疫療法は、多くのがん患者の新たな治療につながっています。好奇心から生まれたテーマをとことん突き進めた結果、大きな社会貢献に至ったのです。本庶先生は、「何ができるか」よりも「何を知りたいか」が研究をすすめるうえで重要だと語っておられます。私はまさにここに学問研究の本質があると思っています。

石坂公成先生とアレルギー研究

もうお一人、知のプロフェッショナルの先達を紹介したいと思います。同じ免疫学の研究者である石坂公成（きみしげ）先生です。昨年92歳でお亡くなりになりましたが、アレルギーの原因物質である免疫グロブリンE (IgE)の発見という世界的業績で知られています。

石坂先生は1948年東京大学医学部を卒業、

現在の東京大学医科学研究所の前身の伝染病研究所で免疫学の研究を行い、1957年には米国に拠点をうつし、生涯を通して、アレルギーの仕組みを探る免疫学の研究に取り組みました。免疫システムは、本庶先生の研究でも触れましたように、外界からの侵入物に対し、自己と非自己を見分けて自身を守る精緻で複雑なしくみです。その免疫のしくみがアレルギーというやっかいな症状をもたらす原因にもなるのです。我が国では全人口の約2人に1人がアレルギーに悩んでいるとされ、それを原因とする花粉症や気管支喘息、蕁麻疹（じんましん）などの増加が社会問題となっています。

アレルギーの原因物質は「アレギン」とよばれ、その正体については学会で長く信じられていた定説がありました。石坂先生はそれに疑問をもったのです。そして、自身の実験データから、当時の技術では同定できないほど微量にしか存在しない別の物質ではないかとの結論にたどりつきました。学説上の常識ではなく自身の実験事実を信じたのです。さらに創意工夫のうえ独創的な方法を考案し、ついに1966年、アレルギーの原因物質として、IgEというタンパク質分子の発見に至るのです。常識にとらわれないという研究スタイルが生み出した大発見でした。

石坂先生は世界中の免疫学研究者から大変尊敬され慕われていました。それは、IgEの発見という大きな業績だけでなく、先生の寛大な精神、オープンな姿勢によって世界のアレルギー学が大きく発展したからです。当時、IgEやその抗体は大変貴重でした。それを、世界中の研究者に何の見返りもなく配布したのです。その結果、大勢の研究者の取組によって、複雑で厄介なアレルギー症状の基本的病態はほぼ解明され、喘息などの治療薬が生み出されたのです。石坂先生は、「competitor 同士はサイエンスの意義を社会に知らせるという共通の目的を持っている。互いに協力することは、相手を蹴落とすよりもはるかに大切である」と語っています。

二人の研究者の共通点について

このお二人の研究者に、学ぶべき点は沢山

あります。

まず第一に、何かを知りたい、という純粋な好奇心から始まっていることです。決して最初から直接的に役に立つ研究を目指していたわけではないのです。大きな課題に立ち向かおうとすればするほど、「知りたい、理解したい」という純粋な原点の重要性が浮かび上がってくるのです。

第二に、定説を安易に信じず、自ら主体的に考える姿勢と創意工夫によって、ブレークスルーを生み出した点です。着実に積み重ねた事実とデータが常識を打破しうる。その過程においては、粘り強く困難に挑戦する強い気持ちと自分を信じる力が必要となります。

第三は、研究開発におけるオープンマインドの重要性です。成果を独占するのではなく広く社会と共有することが、むしろ新しい価値の創造につながりうる。これは、最近その重要性が強調されている、オープンイノベーションの先駆的な例ともいえます。また現代社会における、知的財産の管理のあり方についても、重要な示唆をあたえてくれているように感じます。

免疫システムからの考察

これまで述べてきたように、免疫システムの本質は、「自己と非自己の識別」にあります。このテーマは、免疫学以外の学問においても大きな示唆を与えるものです。石坂先生の弟子のおひとりに、本学で免疫学の教授をつとめた多田富雄先生がいます。多田先生は、免疫学を研究しつつ、自己とは何か、そして、人間とは何かということまでも深く問われました。免疫の本質は、自己とそうでない非自己、すなわち他者の識別にあり、それを通じて生命としての身体を守っています。ところが、免疫には、非自己を単に攻撃するだけではなく、一定の条件下において、自己の中に入ってきた非自己を受け入れることがあります。これは免疫寛容と呼ばれます。人間が持つ免疫システムが、自己と他者を巧みに区別しながらも、時にその他者と折り合いをつけるような寛容性をもそなえ、共存する道を生み出してきたのです。多田先生は、この免疫システムにおける「寛容性」は、自然界にそなわっている知恵の結晶であるという視座を示し、人類社会においても同様の知恵が必要だと論じていきます。

他者に対して「寛容」であるためには、自らを知り、他者を知らなければなりません。手軽なメディアの言説に安易に頼るのではな



く、世界の様々な人々からの声や地域の真の状況を自ら知る努力をしなければなりません。他者に対する敬意と、公正で公平な理解なくして、意義のある連携や協創は生まれません。皆さん自身が、多様性を担う主体として他者に正当に認識してもらうためにも、自身の個性をいっそう磨き、世界に向けて主張していくことが大切なのです。

はじめにお話しした様に、今「デジタル革命」の大きなうねりの中で、皆さんを取り巻く環境は大きく加速しながら変化しています。研究についても、世界を舞台にした競争は激しさを増しています。皆さんもこれまでの研究生生活の中で、高い目標をかかげ、自ら追求すべき課題を探し、その答えに近づくために、時に寝食を忘れて取り組まれたと思います。新しい発見に心躍らせるようなこともあった

一方、思うように研究が進まず、苦しんだこともあったのではないのでしょうか。そのような困難を乗り越えてきた皆さんだからこそ、先人が成し遂げてきたことの価値を深く実感できるのです。修了にあたって、自らの体験をあらためて振り返って見て下さい。そしてその思いをもとに、これから、自信をもって新しい道をすすんでいっていただきたいのです。

本日、学位記を手にした皆さんは、これからそれぞれの進路を歩まれることになります。東京大学もまた、次の70年、UTokyo3.0という新たなステージに踏み出すべく、知の協創の世界拠点としての改革を懸命に進めています。現代社会はいっそう多様で複雑になり、頼るべき絶対的な座標は見当たりません。そのような現代社会において、「知のプロフェッショナル」として力強く歩んで下さい。

皆さんはこれからの歩みの中で、大きな課題に遭遇し、それを解決するために再び原点に立ち戻る必要があるかもしれません。あるいは本学で共に学び、研究をした仲間達と再び協力し合いたいと思うかもしれません。その時には是非、東京大学を活用して、新たな協創の輪に加わっていただきたいと思います。東京大学は常に、皆さんと共にあります。卒業は大学との別れではありません。新たな協働の始まりです。どうか、皆さんには、これからも、本学の成長に積極的に関わって下さるよう、心からお願い申し上げます。

最後になりますが、皆さんが、今後益々、それぞれの職務や研究に邁進されること、そして、皆さんの未来に幸多きことを心より祈念し、私からのお祝いの言葉と致します。学位の取得、誠にありがとうございます。

答辞

(第一部)

法学政治学
研究科 小谷
(福井) 利恵さん



本日は、五神総長をはじめ、御列席の皆様方におかれましては、このように盛大な式を催していただき、修了生を代表し、厚く御礼申し上げます。また、今日まで、広く深く清新な教恩を受け、導いてくださいました先生方に、心より感謝申し上げます。振り返れば、10年前、私は職場の小さな図書室で、一つの論文に出会いました。その論文は、極めて理論的でありながらも具体的に、洗練された言葉に込められた建設的批判は、ただ現状や未来を憂うものではなく、学術と実務の双方に向けて開かれた先導性と発展性を有し、高き空へと一心に羽ばたき行く鳥の如く感じさせるもの

でした。

当時、私は、これを著した研究者の方を存じ上げず、どのような学問分野の論文であるのかも理解していませんでした。しかし、燈のように私の中に生まれた希望は、無謀への躊躇を破き、公共政策大学院の学生として、御指導のお願いにあがる幸運へと、私を誘いました。

そして2年間、私は、様々な分野の授業を受け、キャンパス内の多様な図書館・図書室を巡り、興味を惹かれるままに文献を手にし、読みふけり、思索し、毎日が本当に幸せでした。

そうした、学問の大海原に身を委ねるような学びの中で、私は、今から80年前に刊行された一冊の学術書に出会いました。それは、行政法規上にありながらも刑事処分を適用する特定の条文を「行政刑法」と名付け、その処分法則のあり様を根本から問うものでした。この行政法と刑事法に跨る

問題について、各種文献を読み進めると、その学術書の見解は、現在まで、ほぼ否定されていることがわかりました。しかし、なぜ私には違和感がありました。それは、行政実務の実状に即したその見解が、正しいのではないかと、との直観のような思いでした。その思いを捨て置くことができず、私は、再び無謀への躊躇を破き、職務と両立する長期履修生として、博士課程へ進学しました。

6年の時を経て、今ここに立たせていただいているのは、自らの違和感を解消するに留まらず、かつて一冊の学術書が表した見解について、再度世に問う意義を認めていただいたからにはほかなりません。私が目指したのは、この150年の間に何があり、なぜ今に至ったかを明らかにすることでした。明治時代は言論統制が厳しく、数々の文献にその影響が残されています。このことを、若き学部生の時に知り、立ち尽くすしかなかった私は、研究の道を諦めました。

しかし、四十を前にした学問の大海原での学びは、私に、法学の分野ならば、言論統制を超えられるかもしれないと教えてくれていました。そして、私は、法制史の力を借り、行政法、刑事法の3分野を結び、学術と実務の双方に開かれた論文を記すことを目標としました。こうして完成した論文には、各時代のイデオロギーの中で、書きたくとも書けず、読んでもらえず、言葉を掻き消された研究者たちへの思いが、知らず識らず映し出されていました。

幾つもの元号を超えても直面する言論統制による悲しみを、二度と実務の世界が研究者にもたらさぬことを、そして、学術の世界が、果敢に苦難の時代を越え、学術と実務の双方に開かれた先導性と発展性を有する研究成果を世に示し続けることを、心から願い、8年にわたる研究の時と場を与えてくださった東京大学に、尽きることのない謝意と敬意を表し、答辞といたします。

答辞

(第二部)

医学系研究科
Moe Moe
Thandar さん



Good morning President Gonokami, distinguished faculty, family, friends and my fellow graduating students. Thank you for celebrating such an auspicious occasion with us today. It is a privilege for me to represent the Graduate School of Medicine and make a commencement speech on behalf of my fellow graduating students.

Nine years ago, my sister was studying in Todai as a Master student. She took photos of Todai and sent them to us in Myanmar. All the photos were lovely but one photo stood out. Since then, whenever I thought about my postgraduate study, this photo appeared

in my mind. The photo said to me, "Why don't you come and study in this world-renowned university?" Thanks to Asian Development Bank Scholarship and Todai Fellowship, I had the opportunity to study at this prestigious university for six years and now I am standing inside the Yasuda auditorium, the glorious building in my sister's photo.

After finishing my Master's program, I got married and had a baby during my first year of PhD. Being a full-time PhD student as well as a full-time mother was not an easy path. When I look back to my PhD student life, I see myself energetically working for my research, unconsciously wandering around, helplessly facing the obstacles and then successfully overcoming these obstacles. I believe that almost all the graduating students in this auditorium must have had similar

experiences; but we did not give up and today can see the fruit of our perseverance and unrelenting passion.

My research focused on the "Continuum of Care" in maternal and child health in Myanmar. I traveled back to Myanmar frequently with my daughter for fieldwork and always left her with my parents and parents-in-law. Sometimes, I felt guilty for not being with her all the time at such a young age of one and two. However, in my research, whenever I saw other mothers and babies looking healthy and happy, I was proud of being a mother and also a researcher from Todai. This is because I was working for the health and wellbeing of other mothers especially in underprivileged areas. During this period, Todai was supportive of a mother like me to pursue a PhD. I really appreciate your support.

Here, I would like to express my sincere gratitude to our supervisors and faculty members for guiding us in our academic work. I also want to thank our families and friends for always being there to listen to our happiness and frustration. Last but not the least, I would like to thank our study participants who gladly contributed their valuable time in our studies.

I believe that the reputation of Todai is made up of each and every one under the same roof of Todai including all the students, alumnae, faculty and staff. This reputation is like a burning torch which should burn endlessly. I hope that all the graduating students will make a new mark in their respective fields and the reputation of Todai will continue to be a "Continuum of Light".

Congratulations all fellow graduates!

平成31年度入学式・大学院入学式



平成31年度の学部入学式と大学院入学式が、4月12日（金）、日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約3,100名の新入生と、そのご家族など約5,600名、合わせて約8,700名が出席しました。午前9時45分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の上野千鶴子（うえの ちづこ）認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク 理事長、大塚陸毅（おおつか むつたけ）東京大学校友会会長が登壇し、10時41分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、太田邦史（おおた くにひろ）教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の上野千鶴子 認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク 理事長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 永谷優磨（ながたに ゆうま）さん（理科三類）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱を

もって、11時55分に式を終えました。

午後の大学院入学式には、約2,700名の新入生と、そのご家族など約3,300名、合わせて約6,000名が出席しました。13時25分から運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓のヘンシュ貴雄（たかお）本学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構長が登壇し、14時20分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、大西克也（おおにし かつや）人文社会系研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓のヘンシュ貴雄 本学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 加藤大樹（かとう ひろき）さん（学際情報学府）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時30分に式を終えました。

平成 31 年度入学式 総長式辞

今の時代を理解する

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。令和という新たな時代を目前に控え、平成最後の東京大学学部新入生として皆さんをお迎えすることになりました。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。皆さんはこれまで、東大入試の突破という目標に向けて一生懸命に取り組んできたことと思います。私達の期待に応えて下さったこと、それに向けた皆様の努力に対し、敬意を表します。同時に、愛情を持って皆さんを支えてくれたご家族の方々、関係する皆様に心よりお祝い申し上げます。本日入学された皆さんは3,125名です。

皆さんのこれからの学びの場となる東京大学は、明治10年、1877年に創設され、今年で創立142年となります。創設当時の日本は、文明開化の真ただ中にあり、西欧からの新しい事物や制度との出会いに満ちた激動の時代でした。大学は新たな社会を創るための仕組みや人材を用意するために設置された全く新しい組織でした。

さて、皆さんが存在する現代もまた、「激動の時代」です。明治の激動との大きな違いは、それが人類全体を巻き込んだ大きな転換であるということです。環境破壊やエネルギー問題、大規模テロ、金融不安といった課題は一部の国や地域に留まらず、地球全体を巻き込んだ課題としていっそう深刻化しています。民主主義、資本主義、国際ルールといった人類が長年育ててきた社会の基本的な仕組みそのものを根底から揺さぶる事態になっていることは、皆さんも感じておられるでしょう。特に、自分の国の利益だけを主張して、立場が異なる人たちとの共存を軽視するような傾向がとりわけ目立つようになったことには、強い危機感を覚えます。今の時代を生きる私たちは、まさに新たな激動と向き合っ

ているのです。

このような変動をもたらし、変化を加速している一つの要因は、デジタル化の浸透とその急速な拡大だと言えます。皆さんもよくご存じのように、インターネットを介して、言葉や画像さらには動画といった様々な情報が飛び交っています。これらは、全てデジタルデータとして蓄積され続け、巨大なサイバー空間を形成しています。私達は、実空間すなわち物理空間に暮らしているわけですが、スマートフォンなどを使ってサイバー空間を参照しながら生活するようになっていきます。その結果、物理空間とサイバー空間は不可分なものとして融合が進んでいるのです。

そのような状況の中で、人工知能などサイバー空間の巨大データを活用する技術の展開が様々な場面で急速に進んでいます。同時に、経済的な価値にも大きな変化が見られます。これまでのようなモノの生産から、知恵・情報あるいはそれを組み合わせたサービスへとシフトしているのです。これまで日本を含め先進国では、労働集約的な生産活動を資本集約化の中で経済成長が達成されてきました。今、私達はその延長線上にはない、いわば知識集約型という新しいモデルへと不連続な変化を遂げようとしていると言えます。このような新たな産業「革命」ともいえるパラダイムシフトが起きる中で、そこを生きる私たちは、「人間とは何か」「幸福とは何か」といった根本的な問いに改めて向き合い、価値の本質を見極めることが求められているのです。

大学が社会変革を駆動する

とはいえ、私はこうした変動を悲観的に捉えているわけではありません。「危機はチャンス」というのは使い古された言葉ですが、真実でもあります。そして、これからの社会は、大学こそが主導してより良い未来を創るべきだと私は考えています。私は総長として



総長

五神 真

「大学が社会変革を駆動する」というメッセージを発信してきました。今、その大学に新たに加わった皆さんは、まさにその主役になるのです。

では、なぜ、大学が社会変革を駆動できるのでしょうか。2つの観点から説明できると思います。

1つめの理由は、大学は、多様な人々がそれぞれの違いを尊重し合いながら、協力して共に創造的な作業を行うこと、すなわち協働、を可能にする場だからです。

明るい未来を切り拓いていくには、新しい知恵を生み出すことが必要です。知恵は多様なメンバーが関わってこそ膨らみます。研究でも事業でも、メンバーがそれぞれの強みを持ち寄り、議論し、上手くつなぎ合わされたときに発展するのです。逆にいえば、同じような価値観や知識を持っている人だけが集まっても、知恵は膨らまず、動き始めないのです。

大学には、多様な才能が国境を越えて集まっています。長い年月をかけて培ってきた知恵の蓄積もあり、すぐれた人材をこれまで社会に多く輩出してきました。国内外に広がる人的なネットワークも強みです。これらを存分に活用することで、大学はあらゆるセクターの人々が協働するプラットフォームになる、ひいては社会変革を駆動する拠点になり得るというわけです。

2つめの理由は、大学には、多様な時間の流れが共存しているということです。



近年、政治や行政、あるいは産業界の様々な動きを見ると、その時々判断が短期的な利害に強く振りまわされ、その背後にあるはずの長期的な視野からのビジョンが不在なのではないかと心配になることがしばしばあります。周辺環境の変動があまりに激しく、リーダーが展望をしっかりと描くことがいっそう難しくなっている、あるいはどこかデフレマインドが蔓延し、理想を掲げて冒険するといった前向きな意欲が削がれてしまっているのかも知れません。企業の場合には、その時々数値を気にする投資家や株主からのプレッシャーが過度に強まっていることも原因でしょう。

そうした中、大学には、今もなお、多様なスケールで時間が流れています。この時間についての多様性は、総合大学の際立った特長であり、その重要性はおおに強調されるべきだと思います。私の研究分野ではアトセカンド分光という、1京分の1秒以下のとてつもない超高速の現象を追いかける研究があります。その一方で、数百年いや100億年のスケールを見渡す研究もあります。それらが同じキャンパス内で当たり前のように展開し、共存しているのが大学なのです。遠い過去や、誰も見たことがない遙か未来を往還して考え、自然や人間の本質を追求する中で、何が大事なのかといった問いを立てるのです。そうしたことを自由に論議し、鋭く指摘しあうことが許されるのが、大学という場です。また、失敗や路線変更に寛容であり自由なもの、大学を満たしている時間の特徴です。失敗という経験を糧に、ときにはふりだしに戻り、ゆっくりと安心して考えることができる。こうした様々な「時間」を有する場としての大学が担うべき役割は、いっそう大きくなってきていると感じています。

激動の時代、変革の時代だからこそ、今まさに大学の出番なのです。中でも東京大学は、豊かな歴史に支えられ、文理を越えて行き交う知と人材が揃い、様々な分野で最先端の研究が行われています。東京大学には、より良

い未来社会を構築するけん引役になる責務があります。皆さんはその東京大学に、新しいメンバーとして加わったのです。どうです、わくわくしませんか。是非、その意味を噛みしめて、これからの学生生活を有意義に過ごしてください。

学生生活へのヒント ——ユーグレナの事例

では、これからの学生生活をどのように送ればいいのでしょうか。そのヒントとして、二人の卒業生の話をしたいと思います。

「ベンチャー企業」という言葉を皆さんも聞いたことがあると思います。ベンチャーという言葉はアドベンチャー、すなわち冒険に由来しています。大企業が手をださないような冒険に挑む会社がベンチャー企業だといっても良いかもしれません。今、東京大学はベンチャー企業が生まれるメッカとして注目されています。毎年30から40社程度の新しい会社が東大から生まれ、これまでに335社以上が誕生しています。そのなかに、東大発ベンチャーとして初めて東証一部上場企業になったユーグレナという会社があります。ミドリムシを使ったサプリメントや食品の製造販売を中心に据え、化粧品、製造販売、航空機向けバイオ燃料の開発なども扱う会社です。

その立ちあげの中心メンバーが、出雲充さんと鈴木健吾さんです。出雲さんは1998年に文科3類、鈴木さんは1999年に理科1類に入学され、二人とも農学部に進学します。皆さんより20年ほど先輩にあたります。

ユーグレナは、ミドリムシの学名です。ミドリムシは体長0.1mmにも満たない微生物ですが、動物と植物両方の特性を持ち、活発な光合成機能を有し、59種類の栄養素を含んでいます。この特長によってこれまで、食品化や、油分のエネルギー利用、あるいは環境のための二酸化炭素固定剤、などへの応用が注目されていました。しかし、屋外での大量培養は大変難しく、事業化への道筋は見えていませんでした。そうした中で、出雲さん

と鈴木さんの二人は東京大学で在学中に出会い、共にミドリムシの実用化に向けた取り組みをはじめたのです。

出雲さんと鈴木さんはまず、全国の大学などを回ってミドリムシやその関連領域に詳しい研究者に助言を求めました。面会した研究者は100名近くにのぼったそうです。技術的な開発を担当した鈴木さんは、農学部の卒業論文で、ミドリムシの生育環境の問題をとりあげ、大学院でもミドリムシの研究を続けました。様々な試行錯誤が数年間続きましたが、ついに大量培養法が実現し、事業展開の可能性が開け、2005年に会社を設立したのです。最初の約8年間は本郷キャンパスの起業家が集まるインキュベーション施設に中央研究所をおいて活動していました。

出身高校も入学科類も異なるこの二人が出会ったのは、じつは駒場時代のサークルでした。二人は大学生の投資コンテストなどの活動をするサークルに入り、その先輩・後輩として出会ったのです。サークル活動として、様々な行動を共にする中で、二人は大きな目標を共有するようになります。その目標が、ミドリムシで人間の役に立つ事業を展開するという事だったのです。

東京大学という場を活用する

このユーグレナの出雲さんと鈴木さんのエピソードは、東京大学が社会変革を駆動する、すなわち社会に新しい流れを吹き込む大きな可能性を持っていることを示唆しています。ユーグレナの成功は、出雲さんと鈴木さんの努力にもとづくものですが、東京大学という場をうまく活用したからこそ、可能性が開かれ、さらに大きく展開していったとも言えるのです。東京大学で過ごした学生時代がどんな価値をもち、どんなチャンスに満ちていたのかについて、鈴木さんの経験談から考えてみたいと思います。

第一は、駒場キャンパスで受ける2年間のリベラルアーツ教育の多様性です。鈴木さんは駒場時代にとにかくいろいろな授業を取ったそうです。理Iでの専門と異なる法学や経済学の学問の話は「今もすごく生きている」と振り返っています。関係ないと決めつけずに授業を受けてよかった。それができるのが「リベラルアーツ教育のいいところ」なのです。どのような研究テーマがあり、それがどのよ



うに学問体系としてつながっているのか、多くの出会いと拡がりを経験できる2年間になるはず。自分の関心や可能性を突きつめる時間と空間が保証されているという大学の特長をまず駒場の生活で実感してほしいのです。

第二は、東京大学が創りあげてきた信用です。鈴木さんも出雲さんと共に、ミドリムシ研究を進めるにあたって、多くの人たちを訪ねました。出会ったどの方も、東大の学生ということで、最初からきちんと話を聞いてくれた、それが大変ありがたかった、と振り返っています。東京大学の学生となった皆さんもこれから様々な場面で、そうした親切を経験されると思います。これは私達、東京大学のメンバーのとても大きな共有財産であり、大いに活用すべきです。しかし、東京大学という「銘柄」に甘えたり、よりかかったりするようではいけません。身を引き締め、自分自身の決意を新たにする機会だと受け止めてください。なぜなら、それはこれまでの数多くの先輩たちが、真摯に学問に取り組み、自らの力を高めることで創りあげてきた「信用」だからです。そして、この「信用」という東大の資源をさらに豊かなものにして、それを後輩に引き継いでいく大きな責任を負うことになったということを忘れてはなりません。

まず、踏み出そう

皆さんは「テストの点数」という一次元のものさしで測られる世界から解放されました。これからは、多次元な価値が支える学問の世界の広がりの中をより自由に歩んでいくのです。自分が見てきた価値が何であり、見てこなかった価値が何なのか。これまで関わったことがないようなタイプの人たちとの出会いを楽しみながら、ここで良く考えてみてください。

これから始まる大学での学生生活を実り多きものにするために、私から皆さんにアドバイスを送るとすれば、大事なのは、「まず、踏み出すこと」です。

明日からでも踏み出せる一歩の例を、3つ伝えておきたいと思います。

1つは、東京大学の一員になったというチャンスを最大限生かすため、友人や先輩と交流し、教員にも積極的に質問することです。特に、先生方を大いに活用してください。東



京大学には、学生時代の好奇心と情熱そのままに研究者となり、教員として学生と学問とに真摯に向き合う先生方が集まっています。学問のことで相談したいと思ったとき、世界の最先端で研究者として活躍している先生方が時間を厭わず、議論に付き合ってくれるでしょう。そのことが皆さんの成長を促し、挑戦を勇気づけてくれるはずです。遠慮せずに、先生方の部屋の扉を叩いて下さい。

また、話を聞くだけでなく、皆さんが最前線の学問を直接学ぶというプログラムを今年から始めることにしました。まずは理系から一二年生向け「アドバンスト理科」という科目群を開講します。世界の最先端で活躍する新進気鋭の先生方から、量子コンピュータ、生命進化、細胞の物理学といった知の最前線のテーマについて、基礎からきちんと学ぶことが出来ます。是非挑戦してみてください。

2つめは、図書館の活用です。東京大学には様々な図書館があります。駒場図書館もそのひとつです。

学問の世界は皆さんの想像を遙かに越えた広がりを持っています。そのことを実感できるのが図書館です。足を踏み入れ、歩いて回り、背表紙を眺めているだけでも、学術の拡がりを感じることができるはずです。大学の図書館は、様々な学問の世界への入口になっています。経済学部図書館にはアダム・スミスの蔵書があり、総合図書館では森嶋外が所蔵していた本に直接触れて読むこともできます。法学部の明治新聞雑誌文庫や、学際情報学府の社会情報研究資料センターや史料編纂所のように、世界でも東京大学にしかない貴重な図書館もあります。是非探検してみてください。

実は私自身も、前期課程の学生だった頃、数学や建築学などの進路の選択肢の広がりや悩み、教養学部の駒場図書館で、まさに背表紙を頼りに様々なジャンルの本を手にとっていました。あるとき取り出した本の中で、結晶の成長の速度をめぐり、まだ解かれていな

い現代物理学の難問があることを知りました。それをきっかけに固体物理学に興味を持ち、その研究にのめりこむことになったのです。そして3つめは、国際感覚を鍛えるための授業やプログラムに積極的に参加することです。ユーグレナの出雲さんも、大学1年生のときにバン格拉デシュでの海外インターンシップに参加し、深刻な栄養失調を目の当たりにしたことが、栄養価の高いミドリムシの活用という研究テーマに出会うきっかけになったといえます。

皆さんが生きていく時代においては、世界の多様な人々と関わり、異質さを受け入れながら行動することが不可欠です。その基礎をしつかり身につけてもらうために、昨年度から東京大学で新しい仕組みを創りました。国際総合力認定制度 (Go Global Gateway) です。国際社会で通用する語学力や心構え、コミュニケーション力をバランスよく磨くために皆さんのガイドとなるものです。国際交流や留学に役立つ情報が得られ、留学やサマープログラムに参加するために必要となる語学検定試験の受験料が補助されるなどの支援も充実させることにしました。まずは全員、Go Global Gatewayに登録して下さい。これからの学生生活を豊かにするため、卒業後のキャリアのために大いに活用してください。

これから始まる大学生活を楽しむためには、まずは心身の健康が大切です。私たちはできるだけのサポートを行なっていきます。どうか皆さんの人生が充実したものとなるように、皆さんの健康と健闘を祈っています。

教養学部長式辞

はじめに

平成最後、そして令和元年の新生の皆さん、そして新生をこれまで支えてこられたご家族の皆様、この度はご入学おめでとうございます。東京大学の教員として、また新生の皆さんを最初に受け入れる教養学部の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。

今を去ること38年前の桜咲く春の日、私も皆さんと同じく、この武道館で入学式に参列しました。本日祝辞を述べるにあたって、そのとき教養学部長がどんなことを話されたか、頑張って記憶をたどってみました。残念ですが、何も思い出せません。総長や来賓のご挨拶は記憶に残る可能性が高いと思いますが、教養学部長の式辞は記憶に残りにくいのかも知れません。とくに本日は、五神総長と上野千鶴子東京大学名誉教授という二大論客の間で話しますので、なおさら記憶に残らないでしょう。そういう意味で、気楽にお話しさせていただきます。

歴代総長の式辞の中でも「伝説的」と言われているのが、教養学部出身の蓮實重彦第26代総長の式辞です。伝説的というのは、内容が難解だったことに加え、47分間もあったことです。そのため、式辞の途中で気分が悪くなって医務室に運ばれる学生が何人も出たそうです。この式辞を実際に聞いたある方の話ですが、「全く理解不能な難しい話でした。大学とは凄いのだと思い知りました。」との印象を持ったそうです。案外蓮實総長の狙いはこのあたりにあったのかもしれませんが。私も本日、この蓮實総長の伝説に挑戦したくなる衝動に一瞬駆られましたがそれは止め、いくつかポイントを絞って話したいと思います。

教養学部からスタートする東大生

まず、皆さんが最初の2年間を過ごされ

る教養学部の特色について紹介します。東京大学は日本の大学の中でも珍しく、未だに教養課程を持っています。この教養課程の教育の中心にいるのが、今年創立70周年を迎える教養学部です。よく学外の方に「先生は一般教養ですね」といわれるのですが、これは実は違います。東大の教養学部というのは、法学部や理学部などと同様の後期専門課程や大学院を持つ専門学部であり、その構成教員は授業担当だけでなく第一線の研究者なのです。その端的な例が、2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典特別荣誉教授のオートファジーの研究です。オートファジー研究は実は教養学部で育まれたのです。このように深い専門性をもつ研究者が分野を横断して協力して新分野を開拓し、その知識を活かして、前期課程の教養教育をデザインし、皆さんに教育を提供しているのです。

教養 (Liberal arts) とは何か

ところで教養 (Liberal arts) というのは一体何なのでしょう。石井洋二郎前東大副学長と藤垣裕子教授が書かれた『大人になるためのリベラルアーツ』などによりますと、「人間を解放する学問」であるとか、答えのない問題、それどころか何が問題かさえわからない事項について、市民的倫理観に基づき批判的に物事を分析し、適切な問題を設定し、やがては解決していく能力を得ていくことと捉えられています。そのためには、人類のこれまでの学究の成果を自主的に学び、知の技法と引き出しを獲得した上で、既存の学問の枠組みを超えて新しい問題を発掘し、解決していくことが重要です。教養学部における研究と教育とは、まさに文理を問わず学問の垣根を越えて新しい問題を発掘し、分野を開拓していく姿勢に貫かれています。したがって、皆さんも受け身ではなく自ら学ぶ者となってください。大学の勉強とは教わるだけではなく



教養学部長

太田邦史

く、自ら学ぶものなのです。その結果として、たとえ人工知能が人間の能力を超える時代となっても、その変化に適応できる強靱な独立した市民となることのできるのです。

教養は生涯かけて培っていくもので、前期課程の2年間はあくまで導入期にすぎませんが、最初が肝腎ですので多様な授業や制度を用意しています。まずは語学力や、基礎的な人文・社会・自然科学の知識を身につけます。少し脱線しますが、私は生物学を研究しており、短い期間、フランスで研究したことがあります。しかし、学生時代はドイツ語を学び、フランス語はできません。滞在先のパリは、当時はあまり英語を話してくれる人がおらず、居留していたメゾン・ド・ジャボンという日本館でも、受付担当者は英語も話ませんでした。レストランも黒板に手書きのメニューが書かれていて、何の料理かさっぱりわかりません。そんな状況では、語学というのは、まさに生きるためのサバイバルツールです。こんな経験をしないよう、是非早いうちに外国語をいくつかマスターしておいてください。

新生のための取り組み

皆さん、お手元の統合報告書*を出して見て下さい。この報告書に教養学部の取り組みが書かれています。42ページを見て下さい。初年次ゼミナールのことが紹介されています。初年次ゼミナールは、自発的に探求する力、討議力や批判的分析力を鍛錬する少人



*当日の配布物には統合報告書が含まれていました。

数の討議型講義です。次のページをご覧ください。教養人として必要な英文を書く能力を鍛える ALESS/ALESA、会話力を鍛錬する FLOW などの独自の語学講義も行われています。また、ここには書かれていませんが、教養学部では皆さんが将来世界各地で存分に活躍できるように、多様なグローバル教育の機会を用意しています。なかでも、駒場の教員が世界各国に皆さんを連れていく主題科目「国際研修」は、東京大学でなければ体験できない貴重な学習の機会です。また、トップ層の学生の能力を引き上げる選抜型授業も用意されています。日本語と英語に加えて第三の言語を徹底的に訓練する「トライリンガルプログラム (TLP)」と、その修了後に現地に行き実際に言語を使ってみる「TLP 研修」などは、人生のハイライトの一つになるでしょう。理系でも「アドバンスト理科」という、世界の最先端で活躍する新進気鋭の研究者による新しい授業も始まります。さらには、全学の国際総合力認定制度 Go Global Gateway に登録すると、英語力判定試験の受験奨励金が支給され、自分の国際総合力のレベルを確認できるようになっています。これらの制度をうまく活用して、教養を高めていって頂きたいと思います。

「残念な東大生」にならないために

いっぽうで、昔からある話ですが、一部の東大生は5月頃になるとやる気を失い、卒業する頃には「残念な東大生」になることがあります。入学して周りを見てみると、今まで見たこともない優秀な学生もいるでしょうから、挫折感も味わうかもしれません。本当は人間の価値は多面的に見る必要があり、成績を比較して落ち込むことはないのですが、

もし落ち込んでしまったときは学生相談所や進学情報センターを訪ねて、相談してみると良いでしょう。

皆さんを支援していくのは、ご家族や、教員、職員の方々ばかりではありません。皆さんの先輩である本学の卒業生も親身に協力をさせていただきます。今日はJR 東日本の社長・会長を歴任された大塚校友会会長にご同席いただいております。東京大学の学生の皆さんは、卒業生・在学生・教職員からなる校友会に登録していただくと、4万人を超える卒業生ネットワークに参加でき、さまざまな支援を受けることができます。校友会ではまず4月に皆さんを新入生歓迎パーティーにご招待します。このパーティーには私も参加し、皆さんは先輩や教員と、進路や人生について話すことができます。

教養とは直接関係ないのですが、皆さんには社会で生きていくために必要なマナーも身につけて欲しいと思います。例えば、通学時に井の頭線の電車に乗ると思いますが、混雑時にはリュックサックを体の前で抱える、出入り口付近に立ち止まらずに車両奥に移動する、歩きスマホをしないなどのマナーを守りましょう。また、挨拶は人的交流の基本ですが、東大生はこれが苦手な人が多いようです。人とのコミュニケーションは今後とても重要になります。まずは、大学の正門で守衛さんに挨拶ができるようになってくれるとうれしく思います。

Cool head, but warm heart.

最後に何のために教養を身につけるのかについて話したいと思います。過去の式辞の話に戻りますが、私の入学時の総長は法学部の平野龍一教授でした。式辞の後半で、エ

リートにありがちな自己中心や傲慢な心を戒めつつ、著名な経済学者ケインズの師匠であるアルフレッド・マーシャルの言葉 "Cool head, but warm heart." (訳すと「冷静な思考とともに、暖かい心を持って」) の内容について触れられました。マーシャルは学生時代、登校経路にあったロンドンのスラム街の惨状を眺め、貧困がなぜ生じてしまうのかに思いを巡らせ、経済学を志したといわれています。"Cool head, but warm heart." ということばは、ケンブリッジ大学の教授に就任する際の講演で語られたものです。この際マーシャルは、冷静な思考と温かい心を持ち、周囲の人々の社会的な苦しみに対処できる人材をケンブリッジ大学から輩出したいと述べています。つまり、学生に、苦しみの中にある人のために、自らの頭脳を用いるべきと説いたのです。

昨今、貧富の拡大や社会の階層化が急速に進んでいます。皆さんは、激しい競争の成功者ですが、社会にはそのような機会を得ることができずに、苦しんでいる人も多くいます。いわゆるエリートコースを歩んでいる皆さんではありますが、将来そのような弱者に寄り添い、助けながら、持てる能力を人類社会の幸福のために発揮できるような人物になって頂きたいと思います。

終わりに、東京大学の学生生活を通じて、皆さん一人一人が教養を活かしつつ、情熱をもって個性を発揮し、世界を変える、誰にも代替できない唯一の人材に育つことを期待して、私のお祝いのことばといたします。



祝辞

ご入学おめでとうございます。あなたたちは激烈な競争を勝ち抜いてこの場に来ることができました。

女子学生の置かれている現実

その選抜試験が公正なものであることをあなたたちは疑っておられないと思います。もし不公正であれば、怒りが湧くでしょう。が、しかし、昨年、東京医科大不正入試問題が発覚し、女子学生と浪人生に差別があることが判明しました。文科省が全国81の医科大・医学部の全数調査を実施したところ、女子学生の入りにくさ、すなわち女子学生の合格率に対する男子学生の合格率は平均1.2倍と出ました。問題の東医大は1.29、最高が順天堂大の1.67、上位には昭和、日本大、慶応大などの私学が並んでいます。1.0よりも低い、すなわち女子学生の方が入りやすい大学には鳥取大、鳥根大、徳島大、弘前大などの地方国立大医学部が並んでいます。ちなみに東京大学理科3類は1.03、平均よりは低いですが1.0よりは高い、この数字をどう読み解けばよいでしょうか。統計は大事です、それをもとに考察が成り立つのですから。

女子学生が男子学生より合格しにくいのは、男子受験生の成績の方がよいからでしょうか？ 全国医学部調査結果を公表した文科省の担当者が、こんなコメントを述べています。「男子優位の学部、学科は他に見当たらず、理工系も文系も女子が優位な場合が多い」。ということは、医学部を除く他学部では、女子の入りにくさは1以下であること、医学部が1を越えていることには、なんらかの説明を要することを意味します。

事実、各種のデータが、女子受験生の偏差値の方が男子受験生より高いことを証明しています。まず第1に女子学生は浪人を避けるために余裕を持って受験先を決める傾向があります。第2に東京大学入学者の女性比率は長期にわたって「2割の壁」を越えません。今年度に至っては18.1%と前年度を下回りました。統計的には偏差値の正規分布に男女差はありませんから、男子学生以上に優秀な女子学生が東大を受験していることになります。第3に、4年制大学進学率そのものに性

別によるギャップがあります。2016年度の学校基本調査によれば4年制大学進学率は男子55.6%、女子48.2%と7ポイントもの差があります。この差は成績の差ではありません。「息子は大学まで、娘は短大まで」でよいと考える親の性差別の結果です。

最近ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイさんが日本を訪れて「女子教育」の必要性を訴えました。それはパキスタンにとっては重要だが、日本には無関係でしょうか。「どうせ女の子だし」「しよせん女の子だから」と水をかけ、足を引っ張ることを、aspirationのcooling downすなわち意欲の冷却効果と言います。マララさんのお父さんは、「どうやって娘を育てたか」と訊かれて、「娘の翼を折らないようにしてきた」と答えました。そのとおり、多くの娘たちは、子どもなら誰でも持っている翼を折られてきたのです。そうやって東大に頑張って進学した男女学生を待っているのは、どんな環境でしょうか。他大学との合コン（合同コンパ）で東大の男子学生はもてます。東大の女子学生からはこんな話を聞きました。「キミ、どこの大学？」と訊かれたら、「東京、の、大学……」と答えるのだそうです。なぜかといえば「東大」といえば、退かれるから、だそうです。なぜ男子学生は東大生であることに誇りが持てるのに、女子学生は答えに躊躇するのでしょうか。なぜなら、男性の価値と成績のよさは一致しているのに、女性の価値と成績のよさとのあいだには、ねじれがあるからです。女子は子どものときから「かわいい」ことを期待されます。ところで「かわいい」とはどんな価値でしょうか？ 愛される、選ばれる、守ってもらえる価値には、相手を絶対におびやかさないという保証が含まれています。だから女子は、自分が成績がいいことや、東大生であることを隠そうとするのです。

東大工学部と大学院の男子学生5人が、私



認定NPO法人
ウィメンズアクションネットワーク 理事長

上野千鶴子さん

大の女子学生を集団で性的に凌辱した事件がありました。加害者の男子学生は3人が退学、2人が停学処分を受けました。この事件をモデルにして姫野カオルコさんという作家が『彼女は頭が悪いから』という小説を書き、昨年それをテーマに学内でシンポジウムが開かれました。「彼女は頭が悪いから」というのは、取り調べの過程で、実際に加害者の男子学生が口にしたコトバだそうです。この作品を読めば、東大の男子学生が社会からどんな目で見られているかがわかります。

東大には今でも東大女子が実質的に入れず、他大学の女子のみに参加を認める男子サークルがあると聞きました。わたしが学生だった半世紀前にも同じようなサークルがありました。それが半世紀後の今日も続いているとは驚きです。この3月に東京大学男女共同参画担当理事・副学長名で、女子学生排除は「東大憲章」が唱える平等の理念に反すると警告を発しました。

これまであなたたちが過ごしてきた学校は、タテマエ平等の社会でした。偏差値競争に男女別はありません。ですが、大学に入る時点ですでに隠れた性差別が始まっています。社会に出れば、もっとあからさまな性差別が横



行しています。東京大学もまた、残念ながらその例のひとつです。

学部においておよそ20%の女子学生比率は、大学院になると修士課程で25%、博士課程で30.7%になります。その先、研究職となると、助教の女性比率は18.2%、准教授で11.6%、教授職で7.8%と低下します。これは国会議員の女性比率より低い数字です。女性学部長・研究科長は15人のうち1人、歴代総長には女性はいません。

女性学のパイオニアとして

こういうことを研究する学問が40年前に生まれました。女性学という学問です。のちにジェンダー研究と呼ばれるようになりました。私が学生だったころ、女性学という学問はこの世にありませんでした。なかったから、作りました。女性学は大学の外で生まれて、大学の中に参入しました。4半世紀前、私が東京大学に赴任したとき、私は文学部で3人目の女性教員でした。そして女性学を教壇で教える立場に立ちました。女性学を始めてみたら、世の中は解かれていない謎だらけでした。どうして男は仕事で女は家事、って決まっているの？主婦ってなあに、何する人？ナブキンやタンポンがなかった時代には、月経用品は何を使っていたの？日本の歴史に同性愛者はいたの？……誰も調べたことがなかったから、先行研究というものがあります。ですから何をやってもその分野のパイオニア、第1人者になれたのです。今日東京大学では、主婦の研究でも、少女マンガの研究でもセクシュアリティの研究でも学位がとれますが、それは私たちが新しい分野に取り組んで、闘ってきたからです。そして私を突き動かしてきたのは、あくことなき好奇心と、社会の不正に対する怒りでした。

学問にもベンチャーがあります。衰退していく学問に対して、あたらしく勃興していく

学問があります。女性学はベンチャーでした。女性学にかぎらず、環境学、情報学、障害学などさまざまな新しい分野が生まれました。時代の変化がそれを求めたからです。

変化と多様性に拓かれた大学

言っておきますが、東京大学は変化と多様性に拓かれた大学です。わたしのような者を採用し、この場に立たせたことがその証です。東大には、在日韓国人教授、姜尚中さんもいましたし、高卒の教授、安藤忠雄さんもいました。また盲ろう二重の障害者である教授、福島智さんもいらっしゃいます。

あなたたちは選抜されてここに来ました。東大生ひとりあたりにかかる国費負担は年間500万円と言われています。これから4年間すばらしい教育学習環境があなたたちを待っています。そのすばらしさは、ここで教えた経験のある私が請け合います。

あなたたちはがんばれば報われる、と思っただけで来てはまずです。ですが、冒頭で不正入試に触れたとおり、がんばってもそれが公正に報われない社会があなたたちを待っています。そしてがんばったら報われるとあなたがたが考えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったこと忘れないようにしてください。あなたたちが今日「がんばったら報われる」と思えるのは、これまであなたたちの周囲の環境が、あなたたちを励まし、背を押し、手を持ってひきあげ、やりとげたことを評価してほめてくれたからこそです。世の中には、がんばっても報われないひと、がんばろうにもがんばれないひと、がんばりすぎて心と体をこわしたひと……たちがいます。がんばる前から、「しよせんおまえなんか」「どうせわたしなんて」とがんばる意欲をくじかれるひとたちもいます。

あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝

ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想です。

東京大学で学ぶ価値

あなた方を待ち受けているのは、これまでのセオリーが当てはまらない、予測不可能な未知の世界です。これまであなた方は正解のある知を求めてきました。これからあなた方を待っているのは、正解のない問いに満ちた世界です。学内に多様性がなぜ必要かと言えば、新しい価値とはシステムとシステムのあいだ、異文化が摩擦するところに生まれるからです。学内にとどまる必要はありません。東大には海外留学や国際交流、国内の地域課題の解決に関わる活動をサポートする仕組みもあります。未知を求めて、よその世界にも飛び出してください。異文化を怖れる必要はありません。人間が生きていけるところでなら、どこでも生きていけます。あなた方には、東大ブランドがまったく通用しない世界でも、どんな環境でも、どんな世界でも、たとえ難民になってでも、生きていける知を身につけてもらいたい。大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身に付けることだと、わたしは確信しています。知を生み出す知を、メタ知識といいます。そのメタ知識を学生に身につけてもらうこそが、大学の使命です。ようこそ、東京大学へ。



入学生総代宣誓

和やかな春風に心華やぐ季節を迎えた今日のこの令き日に、平成31年度東京大学入学式に出席できることを、私たち一同、大変嬉しく思います。

今日は、このような盛大なる入学式を私たち新入生のために催していただき誠にありがとうございます。また、この場をお借りしてこれまで支えてくださった家族をはじめとする周囲の全ての方々に感謝の意を表したいと思います。

今、私たちは十分な勉学を修めてきたつもりでいるでしょう。しかし、これまでに学んできたものはこの世の学問のほんの一端に過ぎません。地道な努力の末に、ようやく真の知の世界の入口に到達したのです。

前期課程において、特定の分野に偏ることなく、幅広い分野に目を向け、多面的な視野を養い、そして後期課程で実力をいかに発揮する、これらのための準備に取りかかりはじめたばかりなのです。

また、私たちは多くの点で未熟であります。

五神総長をはじめとする教職員の皆様方や優秀な仲間から様々なことを吸収して自己を磨き成熟させてゆく場、それが知の世界の在り方であると考えます。

昨今、「東大生は勉強しかできない」と言われてしまうことが往々にしてあります。この言葉の真偽を一意に定めることはできませんが、このようなことを言われてしまう余地を残さぬよう、この高尚な知の世界に踏み入ってもなお謙虚な姿勢を忘れず、知識と良識に富む「他人に求められる」人物を目指してゆくべく、邁進してゆきたいと思います。

さて、私たちが切り開くであろう新しい時代は、「令和」という元号の時代と重なってゆくことでしょう。この新たな元号である「令和」という言葉は、天平二年の太宰府に私たちの心を繋げます。今から千数百年前の宴で、梅の花を愛でた人々にとって、その梅の花とは先進文明の象徴としてそこに気高く咲き誇っていたことでしょう。今、私たちは新しい時代を切り開く側に立とうとしてい



理科三類

永谷優磨さん

ます。今こそは、私たち自身が梅の花として花開き、より良い未来を切り開いてゆくべく、勉学に励むことはもちろんのこと、その他にも様々な経験を積み、そこから学び得たものを社会に還元してゆくことをここに誓い、新入生の挨拶とさせていただきます。

平成 31 年度大学院入学式 総長式辞

本日、ここに東京大学大学院入学式を挙行するにあたり、東京大学の教職員を代表して、入学生とご家族の皆様へ心よりお祝い申し上げます。

本年4月に東京大学大学院に入学したのは、修士課程が2,927名、博士課程が1,238名、専門職学位課程331名、合計4,496名です。このうち、外国人留学生は638名です。皆さんは、これからの東京大学大学院での研究および新たな学びと出会いへの期待に胸を膨らませていることと思います。東京大学大学院は、規模、学問分野の幅、研究水準のいずれにおいても、世界最高水準であると自負しています。この恵まれた環境を存分に活用して、大いなる探究心を持って、学問に賭ける自らの夢の実現に向けて努力してください。

この入学式は、平成最後の入学式です。皆さんは、先日発表された令和の時代に学ばれることになります。皆さんには、新しい時代を支え発展させるリーダーとなるように、こ

の東京大学で大いに力をつけ、大きく育てて頂きたいのです。そのために私たち教職員は、皆さんを全力でサポート致します。

世界的な視野とリーダーシップを兼ね備えた人材育成

東京大学は、東京大学憲章において、世界の公共性に奉仕することを宣言しています。2017年6月の指定国立大学の認定にあたり、この憲章の理念を踏まえて、「地球と人類社会の未来に貢献する『知の協創の世界拠点』の形成」という構想を掲げました。かけがえの無い地球を守りつつ、より良い人類社会を創るために、私達が行うべき具体的な行動計画を研究、教育、社会連携、運営の4つの観点から、示しました。大きく変わりつつある世界の中で、私たちの未来をより良くするために、新しい知恵を生みだしていくことが必要です。そのためには、多様な人々が最先端の研究成果を持ち寄り、互いに協力し、様々



総長

五神 真

な角度から議論し、それを膨らませ、高めて行かねばなりません。このような学問への取組を「卓越性と多様性の相互連環」と表現しています。これを強く意識しつつ、学術から価値を創造し、それを持続可能な未来を切りひらくための行動につなげるのです。このよ



うな活動は既に力強く動き始めています。これを広く共有したいと考え、昨年の10月に、全国の大学に先駆けて、東京大学統合報告書、Integrated Reportを公表いたしました。大学がこうした統合報告書を作成したのは世界でも8例目で、先進的な取り組みです。本日皆様に配布した、表紙に赤門のイラストがついた冊子がそれです。「世界的な視野とリーダーシップを兼ね備えた人材の育成」に向けて、現在東京大学でどのような取り組みが具体的に行われているのかを紹介しています。ぜひ、開いて見て下さい。

もちろん、世界のみならず、日本社会の公共性への奉仕も大切です。昨年は、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振（いぶり）東部地震など、多くの災害が発生しました。これらの災害で犠牲となった方々に改めて哀悼の意を捧げます。これまで、東京大学では、多くの教職員や学生が、さまざまな復興支援の活動に参加してまいりました。皆さんも、在学中に機会をみつけ、復興支援の輪に加わってください。教室や研究室では得られない貴重な体験が得られるでしょう。

真の叡智を身につけよう

さて、20世紀は「科学技術の世紀」と呼ばれ、多くの分野で目覚ましい革新が生み出されました。特に、車、高速鉄道、飛行機などの交通手段、コンピュータ、インターネットなど情報通信技術の進歩はめざましく、さらに21世紀にはスマートフォンの普及もあり、人類は国境を越えた交流をリアルタイムで行えるようになり、世界はずっと身近になりました。

また、合成樹脂、エレクトロニクス技術の革新を支えている電子材料などさまざまな革新材料の発明や開発が進みました。化学肥料は食料の安定供給を実現し、抗生物質の発見によって、大勢の人々が病気の脅威から解放されました。たしかに技術革新は、世界中で人々の暮らしの質を格段に向上させたのです。しかし、今もなお、世界各地で紛争はおさま

ることなく、地域間の格差もむしろ拡大しています。世界同時金融不安、地球環境の破壊と温暖化、難民問題など、課題は国境を越えいつそう深刻化しています。これらはすべて地球規模での対応を緊急に求めています。

私が中学生だった頃に「青年は荒野をめざす」という歌が流行っていました。このタイトルには、世界は広く、荒野はどこまでも限りなく続いているという前提が感じられます。しかし、それから約半世紀、今、地球の有限性を強く意識することがむしろ重要になっています。

国際連合が2015年に、持続可能な開発目標、いわゆるSDGsを採択したのは、この地球の有限性と正面から取り組もうとしたからです。SDGsは、貧困、エネルギー、気候変動、健康・福祉など17の分野に関して、それぞれ持続可能な世界を実現するために、先進国と途上国が手を携えて、地球と人類社会の未来に貢献することを目指すもので、本学の使命と合致しています。私たちの前にある課題は、どれも、科学技術だけでは解決できません。技術の本質を十分に理解したうえで、それを制御しながら活用できる真の叡智が必要です。私は皆さんには、そのような叡智をこの東京大学で身につけ、人類が抱える大きな課題に、積極的に取り組める人に育ってほしいのです。

「知のプロフェッショナル」となるための三つの基礎力を養う

このような、知をもって人類の発展に貢献する人材を、私は、「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。「知のプロフェッショナル」となるために、まず次の三つの基礎力を身につけてもらいたいと思っています。

一つ目は「自ら原点に立ち戻って考える力」、すなわち、自分自身で物事の本質を探り、自ら考え判断する力です。スマートフォンなどで手軽に得られる情報を鵜呑みにするのではなく、自ら考え、問いを立てる姿勢をもつことが重要です。皆さんがそれぞれ取り組んでいる専門について、学問の歴史を辿って原点

に遡り、その意義や使命を理解することは、そうした力を得ることに役立つでしょう。

二つ目は「忍耐強く考える力」、答えがあるかどうかもわからない問いに向かい合うときに大切になる力です。これから始まる研究生活の中では、どのように進めれば良いのか糸口さえも見つからない課題に出会うことがきっとあると思います。私自身もこれまでの研究生活の中で幾度となく、そんな場面がありました。そのような時に何よりも大切なことは、あきらめずに考え続けることでした。偉人の伝記を読むと、天才的なひらめきが、散歩の途中や入浴中に突然訪れたというような逸話を良く目にします。しかしそれは、たまたま訪れた偶然のできごとではありません。考え続けていたからこそ、ひらめいたとも言えるのです。こだわらる中で、思考が磨かれ、論理的に突破する力が身につくのです。皆さんがこれから過ごす大学院という環境は、自由に使えるまとまった時間が与えられています。ぜひ、その貴重な時間を活用し、じつじつと「忍耐強く考える力」を鍛えて下さい。

三つ目は「自ら新しい発想を生み出す力」。これは、既存の知の限界を突破する力とも言えます。そのためには、まず先人の仕事をしっかりと学び、きちんと理解しておくことが必要です。確固たる基礎学力の支えがあつてこそ、自ら獲得した新たな知識を、人類共有の知の資産に新たに追加することができるのです。それこそが学問の醍醐味であり、最も楽しい瞬間なのです。

地球規模の課題に立ち向かう——プラスチック問題の事例

さて、この三つの基礎力の応用問題として、ここで20世紀に広まった画期的な新素材であるプラスチックを例に、「環境の世紀」の地球規模の課題について考えてみたいと思います。プラスチックは、モノマーと呼ばれる分子が重合という反応で鎖の様に繋がった、何十万にもなる大きな分子量の高分子、すなわちポリマーによって構成されています。絶縁性に優れ、水にも強く腐食しない物質の開発は、新しい可能性の開拓でした。最初のプラスチックは19世紀後半に開発されたセルロイドで、植物のセルロースを原料として合成されたものです。20世紀に入り、石油化学の発展に伴って、新材料や新しい生産技術

が開発され、プラスチックは爆発的に広がります。軽くて丈夫で長持ちし、さまざまな形に成形加工でき、大量生産を可能にするこの新素材は、私たちの生活に欠かせないものになり、生活を豊かにしました。

しかし、そのプラスチックが今、地球環境に深刻な影響を与えています。プラスチックの使用は今も加速度的に増加し、その製品の多くが、ストローやレジ袋などのような使い捨てです。それらがごみとなり、川から海にたどり着き、微粒子状になって、海流にのり、世界中に広がっています。この海洋マイクロプラスチックが自然環境や海洋生物を始めとする生態系にまで、深刻な影響を与え始めていることは、皆さんもご存知でしょう。今年1月にスイスのダボスで行われた世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議においても、最も注目された課題でした。

プラスチックを完全に回収し、リサイクルすることができれば、自然界には流れ出ません。しかし、それは容易ではありません。使い捨ての製品の使用をすべて禁止することもすぐには難しいでしょう。一方で、環境中で二酸化炭素と水にまで完全に分解される「生分解性プラスチック」への置き換えも検討されています。しかし、これは、コストの問題に加え、地球上のどの場所でも本当に分解されるのか、どのくらいの時間がかかるのかなど、科学的に検討すべき課題も多くあります。さらに、海洋マイクロプラスチックの拡散は、一国が決めただけで解決できる問題ではありません。科学技術だけではなく、国際的な合意形成には法学・政治学、経済学や社会学からの検討が不可欠です。

こうした課題に立ち向かうためには、やはり、「自らの原点に立ち戻って」考えて多面的に分析し、「忍耐強く」問題の所在を正確に把握し、物事の本質をしっかり理解したうえで、「自らの新しい発想」において何をなすべきかを判断することが必要なのです。

研究者の責任

皆さんが「知のプロフェッショナル」を目指し、精進する過程で、一つ心に留めておいてほしいことがあります。それは、「研究であれば何をしても良いのか」という問いです。さきほどのプラスチックの例でもわかる通り、研究の目的は、全く新しいものや、これまで

よりもより良いものを発明・発見することです。もしかすると皆さんは、研究者の仕事は新しい知見を獲得すればよく、その成果をどう使うかは、使う人の方に責任があると考えているかも知れません。しかし、地球に限られた環境であることが明らかになると同時に、情報が瞬く間に世界に伝わり、無数の人々に大きな影響を与えるようになった現在、状況は大きく変わりました。これまでのように、「つくる責任」と「つかう責任」とを分けることが難しくなっています。その研究成果がどう使われ、どんな影響を及ぼすまで考えておく責任が、研究者自身にもあるのです。それにとどまらず、予期しなかった新たな問題が生じたときに、研究者として社会からの問いかけに真摯に応答していくことも求められてきています。

専門分野以外に関心を広げる

そのような責任に応える力を身につけるためには、自分の専門分野以外のことにも関心を広げることが大切です。自身の研究成果がどのような可能性をもっているのか、他の分野の研究と結びつけて考え、分野の「境界」を往復し、他の分野の人にも自分の研究を説明できるように心がけてください。目の前にある大事な課題について他者との効果的な協力関係を築くためには、これが欠かせません。また、学問上の区分だけでなく、言語、国籍など、さまざまな境界を往還して多様な領域や文化を行き来することも必要となるでしょう。東京大学は、そのような力を鍛える場として最適です。その助けとなるように、大学院生のための教養科目を開講しています。すべての研究科および研究所から、その分野の社会的および学問的背景と最先端の研究の魅力を伝えるもので、専門外の学生に向けた講義です。ぜひ、皆さんも積極的に受講してください。

「知のプロフェッショナル」には、「世界の舞台において活躍できる発信力」が必要です。努力の結果折角見出した新たな知も、世界に

発信しなければ、社会に広く影響を与えることはできません。新たな知の価値を理解し、共感して支援してくれる仲間も不可欠です。そのためには他者に伝える表現力を磨くことは重要です。「人にわかりやすく説明すること」と「世界のコミュニティに入ること」が、このグローバル化の時代においてつながっているのです。

共感を広げる発信力を身につけよう

自ら達成した成果について、その価値について共感を広げるためには、研究者仲間だけではなく、誰にでもわかる言葉で表現する力が必要です。相手の立場や関心に応じて、最新の学問知見を説明し、伝えることは容易なことではありません。しかし、そのような能力が現代の研究では求められているのです。では、どうすればその能力が身につくのでしょうか。まず、簡単な一歩から踏み出してください。それは実際に話してみることです。例えば、ご両親、兄弟、恋人、パートナー、友達など自分を大切に思ってくれる人たちに、自分のやっていること、これからやろうとしていることを話してみると良いでしょう。きっといい訓練になりますし、すばらしい会話の時を楽しめると思います。本日ご列席のご家族やご友人の方々、そのような場面では、是非喜んでおつきあい頂くようお願い致します。

さらに、重要なことは、これは研究を行っている皆さん自身の理解を確認し、整理することにも大変役立つということです。うまく説明できないということは、まだ十分深く理解できていないということなのです。さあ、今夜にでも3分でいいので、ためしに話をしてみてください。

世界のコミュニティに入る

世界の共通言語となりつつある英語による発信能力を身につけることも不可欠です。国境を越えた交流があらゆる分野で必要とされ



る現在では、自国だけに留まっているわけにはいきません。しかし、英語が話せるというだけでは意味がありません。本当に大切なことは、伝えるべきものを持つことです。皆さんは将来、これまで以上にさまざまな国の方々と一緒に仕事をすることになると思います。その時に、問われるのは人間としての奥行き、深さです。それにはまず自分の母国の歴史、文化、社会システム、経済のことを理解し、その上で他国のことも理解する姿勢をそなえておかねばなりません。「世界のコミュニティ」に入るとは、他者の歴史や多様なものの考え方を理解し、100年後の人類のあべき姿を共に議論することです。

東京大学には多くの留学プログラムがあり

ます。世界の主要大学と連携した「戦略的パートナーシップ大学プロジェクト」、体験型海外プログラムなど、全学で取り組んでいるプログラムに加え、それぞれの研究科で数ヶ月から数年にわたる留学の機会をサポートするシステムが用意されています。また、今年からはグローバルに活動する企業と連携して、世界のさまざまな場所でその地域の課題を直接学ぶプログラムを始めることにしました。ぜひ、それらの機会を活用して、海外の現場を直に体験し、自らの見聞を広げてください。

さあ、これから大学院での生活が始まります。東京大学は全力で皆さんの夢をサポートします。私は東京大学総長として、皆さんが安心して最高の学びと研究に打ち込めるよう

に、さまざまなレベルで大学院の研究教育環境を充実させていきたいと思っています。健康な精神と肉体を支えにしなければ、夢は実現できません。大学院生の生活は不規則になりがちです。毎日、規則正しく起き、太陽の光を浴び、朝ごはんをしっかり食べてください。また、研究のあいまに時間を見つけ、自分に適した形で運動をする習慣を身につけてください。趣味にも時間を割いてください。

皆さんが元気に活躍されることを期待しています。

研究科長式辞

東京大学大学院に入学、進学された皆さん、本日は誠におめでとうございます。今日のこの門出のよき日を迎え、ご列席のご家族の皆さま、関係者の皆さまもさぞお喜びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。皆さんと同様に、30数年前本学大学院の門を潜り、期待と不安を胸に研究者への道を歩み始めた者として、これからお祝いと励ましの言葉を申し述べたいと思います。

まだ分かっていない古典の言葉

私が研究の対象としているのは、古代中国の言葉と文字です。簡単に言ってしまうと漢文と漢字の歴史なのですが、甲骨文字に代表される出土文字資料はともかく、皆さんの中にはなぜこのようなものに今日的な研究価値があるのか、ピンとこない方もいらっしゃるかもしれません。例えば司馬遷の『史記』は、中国の枠を超えた人類の古典として世界中で読み継がれ、膨大な量の注釈や翻訳が作られてきました。あらかたのことは分かっており、残りは落穂拾いのようなものではないかと。しかしそうではありません。私には、『史記』

の言葉はまだほとんど何も分かっていないのです。

『史記』は優れた歴史書であり文学です。揺れ動く時代に自らの生死と命運をかけて生き抜き、あるいは翻弄され滅んでいった人々の生きざまが、作者の冷徹な視線と、時に矛盾を孕んだ複雑な感情を通してドラマティックに描き出されます。私は高校生の時に翻訳で読んだ『史記』にたちまち魅了されました。優れた作品は原文で読みたいと思うのが世の常です。しかしいわゆる「漢文」ではなく、古代中国語としての原文に向き合った私が直面したのは、何も分からないという現実でした。なぜ、どのような必然性がある、どのような感情をもって、司馬遷はこのように表現したのか、作者にはどのような世界が目映っていたのか、言葉と言葉が表現する世界認識との対応関係が全く分かっていないことに気づいたのです。私だけではなく、敢えて誤解を恐れずに言えば、誰にも分かっていない。これに気づいたことが、私が自らの研究を進めていく上での大きな力になりました。



人文社会系研究科長

大西克也

人文学では、一つの大きな発見によって自分の学術的な地位が確立されることはどちらかというと希なことに属するでしょう。若いころは目の前にある個別の関心に従って研究を進め、業績を重ねて行くにつれて、個別の研究成果の背後にあるより大きなシステムや原理が目に入るようになってきます。何事も一概に言いにくいところが人文学の特徴でもあるのですが、少なくとも私はそのように歩んできました。

古代中国の受動文研究が節目に

今にして思えば、私にとって一つの節目となったのは、2001年にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開かれた第4回古代



中国語文法国際シンポジウムでの発表でした。私が取り上げたのは上古中国語のいわゆる「無標の受動文」です。日本語でも英語でも現代中国語でも、受動文は通常特別な文法形式を使って表現されます。しかし上古中国語には何も文法形式を伴わない奇妙な受動文が存在すると考えられていました。私は、この奇妙ないわゆる受動形式が、能格動詞と呼ばれる動詞にのみ見られるもので、受動とは無関係であるという趣旨の発表を行いました。実はこのような考え方は、今から40年ほど前にアメリカのシコスキーという研究者が発表していたのですが、論証方法に問題を抱えていたために厳しい批判を受け、その後ほとんど注目されていなかったのです。私の発表はシコスキーを参照しつつもゼロベースで論証を積み上げたものでしたが、動詞分類の基本的枠組みに関する当時の常識に反するものであり、その場で学界の権威と目されている研究者から面罵に近い批判を浴せられました。私にとって堪えたのは、権威からの批判よりも、直後に別の研究者から便乗するような形で批判を受けたことです。嵩に懸かって攻め立てるような口調に何とも言えない気分になり、反論しようにも言葉が出なくなりました。しかし数年が経ち、当時その場に居合わせた指導教授から勧められて、私の論文を暗唱するほど読み込んだという中国の若い研究者に出会いました。上古中国語における「能格動詞」というカテゴリも、今ではごく普通に議論されるようになりました。

学問や学説にも流行りがあります。主流の学説に乗って論を進めると、批判のリスクは減らせるかもしれません。流れに乗るのは楽なことです。しかしそれでは本当の意味での学力は身に付きません。ブレイクスルーも生まれません。たとえ一般に受け入れられている考え方であったとしても、絶えず自分の目でその拠り所を検証し、納得できなければ受け入れない勇気が必要です。乗るか乗らないかは自分の学問的良心に依り、責任を以て判断する、それが「知のプロフェッショナル」としての矜持ではないでしょうか。これは学問だけではなく、世の中の全てについて言えることだと私は思います。

元はいい意味だった「付度」

さて私は、古代中国語の研究者として、皆

さんに知っていただきたいことがあります。それは、人の心を「付度」することが、人間と言語にとっていかに本質的な意味を持つかということです。私たちは会話をするとき、話題にする対象について、相手がどのような知識や認識を持っているかを常に推し量り、それによって相応しい表現を探しています。一例を挙げるなら、定冠詞を使うか不定冠詞を使うかは、聞き手がその存在を既に認識しているか否かを、話し手がどう判断するかに左右されます。古代中国語に冠詞はありませんが、相手の認識に対する話し手の判断によって表現は変化します。このような判断基準は、必ずしも会話が行われる文脈上に存在するとは限りません。相手に対する知識にはそれまでに積み重ねられた経験が含まれているからです。会話自体は現在この場で行われているとしても、選択される言語表現には話し手と聞き手の歴史が反映されているのです。これを場に応じて適切に再構成する手段が「付度」に他なりません。古代中国語を話す人はこの世にもはや存在しません。古代人の心を付度しても、正しいかどうか確かめようがありません。そのような中で言葉の研究がいかに困難であることかを想像すれば、私が最初に「何も分かっていない」と言った意味をお分かりいただけるのではないかと思います。「付度」という言葉は『詩経』という中国古代の詩集の中に出てきます。「他人に心有り。予之を付度す。」詩の原文の中では、徳を具えた聖人君子がよからぬ人の心を見破るという文脈で使われています。そのような言葉が、近年特定のバイアスがかかった文脈で使われることがむしろ普通になったのは、とても残念でなりません。漢文の素養が必ずしも一般的でなくなった現在、二千数百年以上使われてきた素晴らしい言葉も、いとも簡単に汚されてしまいます。

私の研究分野は、大きくは人文文学に属しますが、人文文学には他の分野とは些か異なる形で時間が取り込まれていると思います。司馬遷の『史記』が完成してから二千百年以上になりますが、現代の私たちを虜にしてやみません。同時代のお墓から当時の医学書が出土することがあります。医学的な研究もおこなわれているとはいえ、そのまま現代の臨床治療に用いることはあり得ないでしょう。社会は変わります。人の知識や感覚もそれにつれて変化します。それでも古典が時代を超えて読み継がれる背景には、人間の普遍性や文化の持続性が横たわっています。決して今だけが特殊な訳ではありません。人は常に未曾有の事態に直面してきたのです。過去を振り返ることは、今を相対化するだけでなく、未来からの訪れのために扉を開いておくことに繋がります。私たちは過去から未来へとつながる今を生きる一人の人間です。人の人たる所以を問うことは、人文文学の特権ではありません。機械が以前にも増して人に近づきつつある現在、それは現代に生きる私たちすべてにとって、より切実な問いかけとして突き付けられています。文系・理系を問わず、それぞれの立場から自らの課題として向き合う意識こそが、私たち人類の健全な未来を切り開く力になるのではないのでしょうか。

皆さんを待ち受けている未来は、決して明るいものばかりではありません。壁にぶつかり、無理解に苦しみ、希望を失いそうになることもあるでしょう。しかし東京大学には、そのような道のりを歩みながら今日を築き上げてきた教員・研究者が大勢います。困難を乗り越えるのは皆さん自身ですが、そのための手がかりを示してくれるはずですよ。皆さんひとりひとりが知の営為に携わる職業人として独り立ちして行く日が訪れることを祈りつつ、私の挨拶を締めくくりたいと思います。



祝辞

President Gonokami, Distinguished Faculty, incoming graduate students, proud parents and friends,

Congratulations on starting your journey toward higher academic success!

Like so many of you fresh out of college, I first arrived at UTokyo in the fall of 1988 after graduating from Harvard. It was just the final days of “Japanese Glory” (Showa) heading into the Heisei era 30 years ago. No one imagined then that a period of “Peace Everywhere” would see the economic bubble burst, prolonged economic downturn, a tragic series of natural disasters in Kobe, Tohoku and Hiroshima, and the rise of terrorism worldwide. At the same time, major research centers like the RIKEN Brain Science Institute and Okinawa Institute of Science & Technology (OIST) were created and Japanese scientists have been awarded the second highest number of Nobel Prizes so far in the 21st century.

We are again at the edge of another transition, now to Reiwa. What new challenges and excitement await us in the era of “Beautiful Harmony”? This is **your** time. How will you shape it and make your impact? What new discoveries, records, inventions, books or artwork will you produce? When I came to UTokyo as a 22-year old postgraduate, I arrived into the Faculty of Medicine full of cautious optimism, as you do now. My goal was simple: to learn from my scientific hero, the late Professor Masao Ito, who sadly passed away just a few months ago at the age of 90.

Professor Ito was one of the giants of modern neuroscience. Physically tall, his intellect was even larger. He was among the rare pioneers who could think flexibly

across multiple levels of analysis – from synapses to cells, brain to behavior, and molecules to computational models. As I read his book, “*The Cerebellum as a Neuronal Machine*” in the darkened library stacks at Harvard Medical School, I became enchanted with this totally new perspective of revealing the roots of the human mind – not through the conventional approach of philosophy and psychology – but rather through the precise application of natural science and computation. It was simply far ahead of its time, decades before the current boom in artificial neural networks.

But, there is just no substitute to meeting your mentor in person. It is said that a mentor is someone whose hindsight becomes your foresight. This is what the graduate training experience is all about. I encourage you to carefully find that person, your academic soulmate who can inspire you to greatness. I fondly recall and deeply cherish every moment I had to speak with Professor Ito, because his wisdom about life more broadly was so precious. I would like to share five of the highlights with you today.

First, never forget your original motivations. The feeling you have right now, sitting there about to begin your serious academic life is the most important. What are the questions that excite you, the mysteries that puzzle you, the dogma that angers you – think big. These are the ultimate goals that will continue to drive your hard work over long hours to shape your career. Closely related to this motivation is his second piece of advice: choose something that only **you** can do. Be unique in the world.

For Professor Ito, this was to understand the function of the cerebellum (Sho-nou in



ニューロインテリジェンス
国際研究機構長

ヘンシュ貴雄

Japanese). For me, it was how early experience shapes brain development (Hattatu-rinkaiki). I was born in Tokyo to a German father and Japanese mother, but moved to New York at the age of three. Growing up speaking three languages was quite natural for me. Noticing the struggles of my classmates when learning French in school, made me wonder how my brain was different thanks to my family environment. It has been my passion ever since to understand how early life experience “gets under the skin” or imprinted in the brain, especially because they are not always positive such as poverty, abuse or neglect, or risk for mental illness such as autism or schizophrenia. A childhood fascination has become a life goal.

Third, Professor Ito appreciated there is also a “critical period” for a successful career in science. He said it is important to exert your full effort in your 30s. During this time, your training is completed and your unique ideas can bear fruit. If you can catch this moment properly, Ito said, it should be possible to pursue “five great ideas” – one every seven years until retirement. This is exactly what he did, discovering the inhibitory nature of cerebellar Purkinje

cells, their unique synaptic plasticity (called long-term depression), a computational theory for motor learning based upon it, the molecular mechanisms underlying it, and ultimately a broader role for the cerebellum in cognition. Truly amazing, and quite a challenge for those of us already halfway through their career!

Of course, the research road is never smooth, not even for him. So, his fourth piece of advice was especially important: don't fear conflict or avoid competition. Prepare for battle and embrace it, because it moves your thinking and the field forward. This also requires some common sense, which graduate students easily forget. Balance work with physical fitness and good nutrition. I recall many lifelong friendships made swimming on the Tetsumon Swim Club. Perhaps because he was born in Nagoya, Prof. Ito always preferred an Unagi meal for stamina. And sleep! The brain doesn't work without sleep. Protect your most valuable asset, the brain that got you here to UTokyo as an exceptional student and thinker!

Finally, learn to think globally and act locally. "Don't be excessively conscious about being Japanese," Professor Ito would say. You are now a global citizen in the pursuit of knowledge, truth and beauty. Maintaining a barrier-free interdisciplinary and international atmosphere is the vital mission of the University of Tokyo. As Dean of the Medical School, locally, Professor Ito played his part on the global stage by launching the Japanese Neuroscience

Society, the Human Frontier Science Program, the OECD Brain Science & Education initiative and serving as President of International Brain Research Organization (IBRO) and Federation of Asian-Oceanian Neuroscience Societies (FAONS). After retirement from UTokyo, he created the internationally respected RIKEN Brain Science Institute. Few people can have such a broad impact beyond their own science.

But, you can all start today. Look around and welcome the diversity in your department. Make it your goal to meet a new foreign student every week. Practice your English and speak your opinions in friendly debate. Learn to appreciate other perspectives. Escape your "comfort zones" and try new things. At UTokyo, we are lucky to have two World Premier International (WPI) research centers tackling two of the biggest origin mysteries in science: the universe (Kavli-IPMU in Kashiwa) and human intelligence (IRCN in Hongo). Both are running entirely in English with a high turnover of foreign visitors, events and courses for you to enjoy. We can help you learn to communicate globally!

As a brain scientist, I must end with my thoughts on this topic. Neuroscience will have a deep social, cultural and educational impact, because it will eventually reveal what makes us human. Our intelligence reflects a larger more flexible brain that can associate ideas with creativity, imagination, innovation and

art. We also learn by making mistakes, many of them, which help us to grow. Someday soon this will allow us to produce useful artificial intelligences which can extend the reach of human evolution deep into outer space or into the inner worlds of our bodies to cure disease.

Yet, one feature of our brain that stands out among all other species is the ability to delay reward. The release of a small neurotransmitter called dopamine will make animals wait a few minutes in expectation of some food or juice. But, humans have evolved mechanisms that allow us to plant seeds, work the fields and wait months if not years for the final harvest. Higher education is the ultimate delayed gratification ritual. You have chosen to forego high paying jobs in the "real world" to sharpen your mind and dive deep into problems that may or may not be solved in our lifetimes. The romance of academic freedom and promise of big breakthrough discoveries drives you like no other. Don't lose that original motivation. Take care of your health. Find the right mentor who will earn your loyalty, then go forth and spread beauty and light!

入学生総代宣誓

本日はこのような素晴らしい式を挙げていただき、心より感謝申し上げます。これからここ、東京大学大学院での研究活動を通じて、偉大な先人たちが築きあげてきた知のネ

ットワークに参入し、志を同じくする仲間とともにその拡大・発展に貢献できることが楽しみです。

さて、入学生を代表して宣誓をおこなうに

あたり、ここでは「学問を修める者が持つべき態度」についてお話をさせていただきたいと思います。私が思うに、大学院という学問共同体において知を追求する者に欠かせない要

素、それは様々なものに対して「開かれている」ことです。

第一に、研究という学問的営みは研究者ひとりの中に閉じたものではなく、他の研究者に開かれたものでなければなりません。たとえば私たちの研究成果は引用・被引用というネットワークに埋め込まれて初めて意味を持つものであり、知的文脈を無視した研究は、自己満足のための個人的な主義主張でしかありません。また研究者間での健全な相互批判・相互監視は、学問共同体の知的水準の維持・向上に大きく寄与するものとなるでしょう。

第二に、研究者は自分の専門に閉じるのではなく、他の研究領域に開かれていることが求められます。自らの専門を基盤にしつつ、他の学問分野の知見も積極的に吸収・応用する研究者たちによって、これまでも人類の英知は大きくおし拡げられてきました。

そして第三に、大学院での研究活動は学内に閉じることなく、社会に開かれている必要

があります。特に近年は研究データや論文の電子公開など、研究成果を広く社会に還元しようという動きが広がりつつあり、より社会に根付いた、透明性の高い研究活動をおこなうことが重視されています。

このように、いくつかの意味で「開かれている」ことは、私たちが研究を進める上で欠かすことのできない要素です。これから本格的に研究に取り組む中で、思うような成果が得られず、苦悩や焦燥に駆られることもあるでしょう。しかしそうした苦境にある時こそ、開かれた態度で誠実に学問に向き合い、着実に歩を進めることが求められます。

よって私は本学新入生を代表し宣誓します。学を志すものとしての責任と矜持を持ち、先人たちの築き上げた学知に敬意を払い、真摯に学問に取り組むことをここに誓います。

最後に、私自身が誠実さと謙虚さを忘れず、自らの研鑽を絶やさぬことを改めて誓い、宣誓の言葉の結びと致します。



学際情報学府

加藤大樹さん

式典写真: 尾関裕士

改元記念「平成の天皇陛下と東大」

宮内庁サイト(www.kunaicho.go.jp/page/gonittei/)より

H7.12.11	天皇皇后両陛下 ご覧 (特別展示「ネアンデルタールの復活」)(総合研究資料館)
H8.7.27	天皇皇后両陛下 ご視察 (理学部附属植物園日光分園)
H9.10.5	天皇皇后両陛下 ご視察 (海洋研究所大槌臨海研究センター)(大槌町)
H9.11.26	天皇皇后両陛下 ご覧 (東京大学創立 120 周年記念「東京大学展」)(安田講堂)
H15.1.16	天皇陛下 ご入院 (医学部附属病院)
H15.2.8	天皇陛下 ご退院 (医学部附属病院)
H16.7.13	天皇皇后両陛下 ご視察 (宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設)(岐阜県)
H18.4.10	天皇皇后両陛下 ご視察 (理学系研究科附属植物園)
H20.4.30	天皇皇后両陛下 ご覧 (東京大学創立130周年記念特別展示「鳥のビオソフィア」)(総合研究博物館)
H23.11.6	天皇陛下 ご入院 (医学部附属病院)
H23.11.24	天皇陛下 ご退院 (医学部附属病院)
H24.2.11	天皇陛下 ご検査のため医学部附属病院にご入院
H24.2.17	天皇陛下 ご入院 (医学部附属病院)
H24.2.18	天皇陛下 ご手術 (医学部附属病院)

H24.3.4	天皇陛下 ご退院 (医学部附属病院)
H25.1.27	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H26.1.25	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H27.1.24	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H27.8.9	天皇陛下 皇后陛下のご検査結果ご聴取 (医学部附属病院)
H28.2.13	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H28.7.10	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H29.8.6	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H30.7.29	天皇皇后両陛下 健康診断 (定例)(医学部附属病院)
H30.8.20	天皇皇后両陛下 ご臨席 (国際生産工学アカデミー第68回総会開会式及びレセプション)(安田講堂)

入学式の式辞や祝辞でも言及されていた新元号「令和」。今回の改元を記念して、平成の31年間に天皇陛下が東大にいらっしゃったご足跡を、宮内庁ホームページの公開情報からとりました。周年記念などの展示のご高覧、日光、大槌、神岡といった地方施設のご視察、ご手術や健康診断のためのご来院など、東大には幾度となく足をお運びいただいていた。そのほか、ご進講やご懇談などのために東大の教員が御所に参上した機会もH12年8月を皮切りに26回を数え(名誉教授を含む)、浅からぬご縁があらためて感じられます。令和の新時代、上皇陛下としてお越しになる日はいつになるのでしょうか。



海と希望の学校 in 三陸

第1回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターを舞台に、大気海洋研究所と社会科学研究所がタッグを組む地域連携プロジェクトがスタートしました。海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の試みです。本学の皆様が羨むような取り組みの様子をお伝えします。

「海と希望の学校 in 三陸」開校！

北川貴士

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
准教授

大気海洋研究所と社会科学研究所との文理融合型プロジェクト「海と希望の学校 in 三陸」が開校しました。

三陸の沖合には暖流と寒流がぶつかり合い、豊かな漁場が広がっています。入り組んだ海岸線に沿って点在する村々には、各湾固有の風土や文化が根付いてきました。しかし、そこでは過疎・高齢化の問題や東日本大震災による被害を乗り越えた先の希望、あるいは将来への展望が求められています。岩手県大槌町に建つ大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターは、津波被害の実態調査を進める中で、もう一歩進んだ地域復興への貢献にはそこに居住されている方々の暮らしぶりを知る必要があることに気がきました。海の特徴と住む街の特徴とは、人々の生活を通じて深く結びついているはずです。そこで、当センターと、釜石市に研究拠点を置く社会科学研究所とが連携し、「海と希望の学校 in 三陸」を開始することにいたしました。

このプロジェクトでは、

- ◆三陸各湾の海の特徴、そこに生息する生物とその変動を明らかにする。
- ◆地域ごとの暮らしと文化の特徴（地域（ローカル）・アイデンティティ）を明らかにする。
- ◆地域ごとの可能性を地元の小・中・高校生たちとともに考え、将来への希望を見出すとともに、その実現を目指す人材を育成していく。

こういったことを目指しています。

サケの鱗を用いた生物実習の様子。



すでに開始したイベントもあります。例えば、小中高校の生徒対象の「対話型授業」については、2018年7月のセンター開所式の前日に、大槌学園4年生をセンターに招いて「ふれあい体験」を実施しました。エントランスホール天井に描かれている、海の生命観をテーマとした「生命のアーキベラゴ」（『学内広報』no.1513表紙）を見ながら、作者・大小島真木氏やセンター・スタッフによる講義を行いました（写真1）。今年2月には盛岡第一高校で出前授業を行いました。また、3月には釜石高校SSHの生徒さんたちをセンターに招き、海洋観測やサケの鱗を用いた生物実習（写真2）のほか、海洋関連書籍の書評合戦「海のビブリアバトル」、生徒さん自身に三陸名物の磯ラーメンを作ってもらい、磯とは何かを知ってもらう「磯ラーメン大会」を行いました（写真3・4）。

今後は、様々な手段を用いて三陸沿岸の魅力・活力・底力を発信していきます。センターには展示室「おうち海の勉強室」を今年夏以降に開設する予定です。また、「海と希望の学校 in 三陸 盛岡分校」を設置し、内陸部にも三陸の情報を



エントランスホールの天井画「生命のアーキベラゴ」を眺めながら、作者の大小島氏（右端）からレクチャー。

発信していきます。なおSNSについてはFacebookやTwitterを開設しており、センターや大槌とその周辺の毎日の様子を配信中です。都会の方からすると非日常的なコンテンツに溢れています。「@umitokibo」で検索してみてください。

今年度の目玉として、3月にリアス線[※]が開通した三陸鉄道とジョイントで列車を利用したイベント「海と希望の学校 on 三鉄」を開催し、地域の皆様に海を知り、身近に感じてもらう機会を設けたいとも考えています。

今後はぜひ楽しみにしてください。どうぞよろしくお願いいたします。



各班5〜6名で33品の食材から「磯」をテーマに8品を選び、「磯ラーメン」を調理！



制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）



※3月23日、復旧したJR山田線の「釜石〜宮古」間が三陸鉄道に移管され、「盛〜釜石〜宮古〜久慈」間163kmが新たに「三陸鉄道リアス線」として開通した。

総長室だより

第21回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

五神 真



人文社会科学での議論に触れて

今回は、「人文社会科学振興ワーキング・グループ 報告書」(2019年3月25日)についてお話しします。この報告書は、石井洋二郎前理事・副学長、森山工副学長の下で、文系の先生方が当事者としてじっくり時間をかけて議論し、まとめたものです。

私は、総長として東京大学の学術における人文社会科学の重要性を常に意識して来ましたが、専門が物理ということもあり、文系の先生方自身による本格的な議論に触れるのは初めてでした。しかし、本学が重視しているSDGsと人文社会科学との関わりについて、第一章で紹介された議論は読み応えがありました。これを読んだある理系の先生が、受験時代の現代国語の問題を思い出す、と述べられたように、気楽に読める文体ではありません。にもかかわらず、落ち着いてきちんと読むと先生方の熱い思いがひしひしと伝わってきます。まず、「人文社会科学系」と一口に呼ぶことが多いものの、人文学 (humanities) と社会科学 (social sciences) は分けて捉える必要があるということが論じられます。法学や経済学、社会学などははじめとする社会科学は自然科学と共通の仮説検証的な特徴を持つ一方、哲学や史学、文学といった人文学は問題発見的であり、仮説発想的な特徴を持っている。そして、社会科学は「社会実装」において、人文学は「社会構想」という点において優位性があるとされます。文理を問わず近代の他の学問が検証と応用を重視する「科学」に依拠しているのに対し、人文学はそこに留まらず愛や喜びや絶望をも含めた人間本性 (nature) に迫ろうとする際立った特性があるというのです。だからこそ「言葉」が重要になります。物理学では、精緻な論理を構築するために数学がまさに言葉として使われますが、人文学では多義性が不可避な自然言語を道具とするがゆえに、行間や言葉の奥深くにある真意を探っていくという緻密で繊細な知的作業が必要となり、それを通じてこそ想像力・創造力が研ぎ澄まされるのでしょう。しかし、これは自然科学の中にも存在すると私は感じています。宇宙の成り立ち、知性の原理を探るといった、研究の最前線では、跳躍的な創造力が新たな学問を生みだしています。各分野の特性をより深く理解する不断の対話と解釈の営みがあってこそ、「科学」をめぐる境界をも越えた真に新しい学問を生みだすことができるのだと思います。本報告書を読んで、改めてそうした思いを強くしたところです。「東大ポータル」から全文を読むことができますので、ご一読をお薦めします。

UTokyo

第12回

バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑥

ことだまくん



構内の駐輪場を巡回して整理整頓

——どんなお仕事を？

「聴覚障害を持つ職員5人と手話が出来るコーディネーターで本郷キャンパス及び東大病院の駐輪場の整理、美化、看板等の点検と事務処理が主な日常業務です。自転車の整理を中心に、看板が通行の妨げになっていない



チームカラーのユニフォーム

施設部環境課
交通管理チーム
井上英生さん(44)
趣味:ハンドメイド、ガーデニング

か、台風や強風の後には転倒していないか確認したり、点字ブロック上やスロープ上、その周辺に障害物が置かれていたり、駐車、駐輪されている時は、利用者の歩行の安全を確保するため、障害物を移動したり、張り紙で注意を促しています。天候によっては室内業務を行い、事務処理や各種掲示物の作成もしています」

——台数が多い駐輪場というところの辺ですか。

「理学部2号館の脇、教育学部前、法学部3号館前などは100台以上あることも多いですね。多くの車両をきれいに並べるには、前輪を少し斜めにして位置を揃えるのが肝です。前カゴが大きいと難しいですけど」

——駐輪NGの場所にある車は撤去ですか。

「点字ブロック上またはその周辺に駐車されている場合は、移動を促す注意書をフロントガラスに張り付けています。あと、未施錠の自転車には盗難防止のため施錠を呼びかける注意書をつけます。雨の日は注意書の作成や駐車情報の入力作業などを行っています」

——ご自身の聴覚障害はどのようなものですか。

「内耳の神経に障害が残る感音性難聴というものです。子供の頃は聴力60dbと中度の難聴でしたが、次第に悪化し今は両耳120db。音を言葉として聞き取れません。どうにか話せますが、コミュニケーションは手話と読唇、時には筆談も用いています」

——東大に来る前は何をやっていましたか。

「衛生用品の大手企業のマーケティング事業部で働いていました。途中で二人の子供にも聴覚障害があると分かり、退職して子供の特別支援校に付添い通う日が約10年続きました。もう一度パートで働こうと思い、ハローワーク経由で東大にきました。情報保障が徹底しているこの部署で働けて幸せです」

——仕事のほかで好きなことは何ですか。

「家がマンションの1階で、猫の額ほどの庭があるので、ガーデニングを楽しんでいます。カップのように美しく咲くイングリッシュローズがお気に入りです」

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第156回

RELAY COLUMN

本部産学連携部
産学連携推進課長

三澤純子

平成最後の記念になります！



この建物の1階にいます。

産学連携部は、部長と4名の課長の体制になっています。その中でも、私の所属する課は、総務、人事、財務系全般を担当しています。去年は国際オープンイノベーション機構の設置や東大関連ベン

チャー企業を支援するためのインキュベーション施設の増設や新設など、他には無さそうな新しいことが盛りだくさんでした。今年も、何かとたくさんあるかな、って感じです。

新しいことが多いこともあり、産学協創推進本部を初め、他部署の方々やもちろん産学連携部本体の協力を得ながら、楽しく働かせていただいています。

さて、平成最後の月を迎え、この執筆を通じて「私のお仕事」を改めて振り返る機会をいただき、ほんと、色々な方々に支えられているなあ、と感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りて、ありがと〜！

最後に、なんと産学からの初登場！こんなに掲載しているのにビックリです。良い思い出になります。



産学的女子会で楽しい時間でした。

得意ワザ：オフモードへの切り替えの早さかなあ
自分の性格：長女気質と時々おばあちゃん
次回執筆者のご指名：永友敦子さん
次回執筆者との関係：医科研で同じ課でした
次回執筆者の紹介：笑顔で素敵な気遣い系図書女子

シリーズ

第20回

連携研究機構

情報セキュリティ
教育研究センター
(SIセンター) の巻

話／機構長
中村宏 先生

技術と教育で情報セキュリティを実現

——AI、MI、VRに続く「SIセンター」ですね。

「暗号や認証の技術が筆頭に、Security Informaticsの研究はいろいろと進んできましたが、セキュリティインシデントは減っておらず、多くの活動を情報世界に依存する現代では、社会的損失は増えています。こうした事象を減らすには技術だけでは足りないのです」「悪意ある者は個人の油断を突きます。典型的なのは標的型メールです。たとえば、面識がある人のメールを装って、打ち合わせ場所変更の添付ファイルを送るものです。普通開きますよね。そのファイルでPCをウイルスに感染させ、端末から組織の情報を盗みます。実はメールのヘッダをよく確認すれば気づくのですが」

——普通の人はそこまで確認しませんもんね。

「交通事故の死者数が近年減っているのは、エアバッグなどの技術の普及に加え、人々の意識の変化も大きな要因です。幼少時から交通ルールは教育されますし、シートベルト着用率も向上しています。SIでも同様に技術も重要ですが個々人が意識を高めることも重要です。そうした認識をもとに、情報理工学系研究科が責任部局となり、工学系研究科と情報基盤センターとの連携で生まれたのが、SIセンターです。基盤技術の研究を行う両研究科と大規模なネットワークを実運用するセンターが互いの強みを相乗させることでSIを進化させるとともに、実践的な人材育成にも取り組みます」

——このマークはどんな意味合いですか。

「「Si」を複数の部品で表します。一つでも向きや位置が変わるとSiに見えません。専門家に任せず全ての主体が適切な役割を果たすことで社会全体の情報セキュリティを実現しよう、との思いをこめました。AIなどに比べ、SIは利益に結びつかないと思われがちですが、何かあった場合の損失を考えると重要性は明らかです。来たるデータ活用社会で新しい価値を創出する基盤がSIなのだという意識を広めたいですね」

——SIの観点から教職員への助言をお願いします。

「私が情報基盤センター長だった頃、事前に告知した上で訓練用の標的型メールを構成員に送付しました。健康診断の日程について、という標題で偽の添付ファイルをつけたところ、数人の教員が引っかけかかってしまいました。慢性的に多忙でメール処理を短時間で済ませようとしたのが要因です。欺されるか否かは、意識の度合いだけではなく、個人のその時の状況にもよります。インフルエンザのように誰でも感染するのがサイバー攻撃です。心してください」

si.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・第141回 バイブル

情報学環教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

佐倉 統

あらためて、専門家と社会の ギャップを考える

2年前から理化学研究所の革新知能統合研究センター（略称AIP）を兼務している。人工知能（AI）と社会や倫理の関係を研究するグループの一員である。

AIには昔から興味があって、1990年代は人工生命界隈の周辺もうろろしていた。人工知能学会誌にも論文を2003年に書いている。とはいえその頃はここまでAI研究者と身近に長時間付き合う機会はなかったので、いろいろ新鮮である。

興味深いのは、理研AIPや人工知能学会などのAI研究者の多くが、「AIの専門家」を自称していないらしいということだ。確認できた範囲だと、「専門は機械学習です」とか「画像処理やっています」とか「自然言語処理です」などと言う人がほとんどだ。

そこで、なぜ「人工知能研究者」を名乗らないのかをもう少し聞くと、どうも、社会的にブームになっていることへの違和感を持っている専門家が多い。このあたりはちゃんとした調査をしたいと思っているが、「技術的にはここまでしかできないのに社会的にはとんでもないことを期待されている」のがAIブーム、という認識があるようだ。

先端的な技術や研究について、専門家と社会一般とで認識がずれるのは珍しいことではない。というか、常にそのような状況は繰り返されてきたわけで、だからこそ科学技術インタープリターが必要とされているのだが、AI周辺でも事態は同じようだ。

もちろん、このようなギャップは少ない方が社会的な混乱も起こらないのではあるが、しかし、ものは考えよう。ダーウィンの自然選択説は、それまでは誤差（ノイズ）とみなされていた同種内の個体差（変異）が進化の原動力だと見抜いたところに革命的な意義がある。同じように、専門家と社会のギャップも、新しい科学技術が社会の要求や希望をとらえて発展していく契機になるのではなかろうか。少なくとも、専門家と社会の間にギャップがあることで、双方お互いに批判し合うのは生産的ではない。

いや、そのためにこそ科学技術インタープリターが必要なんでしょう！という話になると、また振り出しに戻ってしまうのだけだ。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し！ 文書館

The University
of Tokyo
Archives



第19回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

偽学生、あらわる！

先日、書庫にて今春新規公開の法人文書を整理していたところ、気になる簿冊を発見しました。その名も「偽学生関係」（S0039/SS08/0004）。学生部学生課が作成した明治期からの膨大な記録群に含まれるもので、調査業務シリーズの1冊でした。さて、「偽学生」とは穏やかならず。内部を開いていきます。



文書の作成時期は昭和9年から16年、内容は大半が東京帝大生を騙った詐欺事件、「偽帝大生」出現への対処によるものでした。ことの発端は昭和10年2月、大阪市内の実業家からの寄附金が「共済部」宛に届きます。送り主によれば「勤務先に帝大生数名が訪れ、東北地方冷害の困窮学生救済等を目的とする寄附を依頼された。彼らは制服制帽を着用し、学生証と共済部長末弘厳太郎名による委員証明書も提示した」とのこと。学内に共済部はなく、この学生は偽名と判明、部長とされた法学部教授末弘も何ら関知しない事態でした。

同様の照会も複数あったため、大学も新聞で注意を喚起します。すると北海道から近畿まで、偽名や実在学生を騙るもの、単独や集団など多様な偽学生が出現し、学生援助を目的とした寄附金や物品販売（多くは粗悪文具、なかには「トーダイ印」鉛筆も）を強要する事件の報告が相次ぐ結果となりました。「そんな振る舞いは帝大生にふさわしくない」との市民の箴言や、一緒に嵐山見物をと誘われ、高級時計を交換・詐取された哀れな京都のカフェ女給の手紙も綴じられています。その後、12年頃には沈静化しますが、15年になると再燃、朝鮮京城、満州奉天などから報告が上がります。なんと「偽帝大生」は海外雄飛を遂げていました。

事件の信憑性を高めた制服制帽や学生情報は、古着・古書市場で入手できました。印鑑や証書の偽造も行われ、そこからアシがつく事例も。また紛失や盗難にあった学生証の使用例も多く、その被害学生への事情聴取記録も生々しい声を伝えます。出身地での名声が利用される例もあり、知的エリートとして信頼を得ていた帝大生ゆえの危険性、社会や地域のなかでの存在感を浮き彫りにする記録といえるでしょう。

個人情報の管理はくれぐれも慎重に、という教訓をこめて。気になる方はぜひ文書館までお越し下さい。
（特任助教・秋山淳子）

東京大学文書館 www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル（一部省略している場合があります）
3月11日	本部広報課	広報誌「淡青」38号（美術号）を発行しました
3月12日	薬学系研究科・薬学部	細胞分裂期の中心体の制御機構の解明
3月12日	教育学研究科・教育学部	教育学部附属中等教育学校で68回生卒業式開催される
3月12日	法学政治学研究科・法学部	第五回東京大学—北京大学フォーラム 東京大学—ソウル国立大学戦略的パートナーシップ 国際ワークショップ「Energy in the 21st Century: Laws, Policies and Technologies」開催
3月12日	グローバルキャンパス推進本部	第5回戦略的パートナーシップシンポジウム開催
3月13日	本部人事給与課	「平成30年度東京大学卓越研究員（公募型）」9名を決定
3月13日	工学系研究科・工学部	藤田誠教授（応用化学専攻）が恩賜賞および日本学士院賞を重ねて授与されました 藤野陽三名教授（社会基盤学専攻専攻）が日本学士院賞を授与されました
3月14日	本部学生支援課	平成30年度体験活動プログラム報告会開催
3月14日	医学系研究科・医学部	高柳広教授（病因・病理学専攻 免疫学分野）が日本学士院賞を授与されました
3月15日～ 4月4日	広報戦略本部	声を上げることのできない発展途上国の人々の声を聞き続ける 障害という切り口を通して社会を見ていくということ 触媒で生命の可能性を「わがまま」に広げたい 未来のシナリオを用いて地球温暖化対策の政策選択肢を中立的な立場で提示する 事故調査委員会的な観点でパレスチナ問題に取り組む 経産省官僚から、人を育てる大学人に。「プラグマティック」に地球の未来を考える 難病を克服する医療技術や薬を、基礎研究からダイレクトに創り出す 史料を読みこみ、「見えないもの」から「見えるもの」をあぶり出す 走りながら電気を受け取れる車で、道なき道に轍を刻む 「もう一声」を追い求め、世界最高性能の超大規模シミュレーションアルゴリズムを開発 光を当てる場所を変えてみたら、自分の道が見えてきた みずからガラパゴスに閉じこもり、超高精度の時計を作って世界一に 「仏教を科学する」をモットーに、仏教の歴史と思想的源泉を探る 平家物語にちなんだ簞（えびら）と幾何学的表現論との不思議な関係 人間の脳は仲間内を超えて、社会の分断を克服できるか / UTOKYO VOICES
3月18日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム 第12期 履修証授与式の開催
3月19日	本部広報課	シンポジウム抄録・宇佐見圭司《きずな》から出発して 東京大学美術作品展／広報誌「淡青」38号より
3月19日	本部博物館事業課	IMT学生ボランティア募集
3月19日	工学系研究科・工学部	ピコ秒で動作する超高速メモリの実現に向けた新たな進展
3月19日	本部学生支援課	平成30年度 フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会開催
3月19日	理学系研究科・理学部	永嶺謙忠名誉教授（物理学専攻）が日本学士院賞を授与されました
3月19日	医学系研究科・医学部	糖尿病・脂肪性肝炎の新たな発症機序の解明
3月20日	社会連携本部	東京大学基金寄付者インタビュー第十九回：倉本 聡様
3月20日	総合文化研究科・教養学部	博士課程留学生のキャリアビジョンを支える自己認識
3月22日	附属図書館	英国の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）の手稿を公開しました
3月25日	医学系研究科・医学部	遺伝情報を正確に守るための新たなDNA修復メカニズム
3月25-26日	本部総務課	平成30年度学位記授与式を挙行 平成30年度卒業式を挙行 平成31年度入学式について
3月26日	総合文化研究科・教養学部	磁化を持たない反強磁性絶縁体のスピン制御へ向けて
3月27日	生産技術研究所	第12回東京大学学生発明コンテストが開催されました
3月29日	医学部附属病院	バーチャルリアリティ治療で緩和される幻肢痛の特徴
3月29日	本部社会連携推進課	MIT Disaster and Resilience Trekが開催されました
4月1日	本部広報課	平成31年 部局長交代のお知らせ
4月1日	生産技術研究所	平塚市と生産技術研究所が連携協力協定を締結
4月1日	新領域創成科学研究科	ItoP 次世代電気自動車の試乗会、東大柏キャンパスにて大盛況に終わりました
4月2日	大学総合教育研究センター	「大学で教える」を学ぼう。東大FFP大学教育開発論 第13期受講者募集！
4月2日	社会科学研究所	2019年度「東京大学地域貢献見える化事業」研究助成申請の受付について
4月4日	本部広報課	未来地図を描く：大学の新たな役割を／総長室だより～思いを伝える生声コラム～第20回



CLOSE UP 次世代電気自動車「ItoP」の試乗会を開催

(新領域創成科学研究科)



(左)「しなやかなタフポリマー」を適用した「ItoP」が構内を疾走。(中)伊藤耕三先生と三谷啓志先生(前研究科長)。(右)次世代型電気自動車を体感する参加者の皆さん。

3月26日、柏キャンパスで、新領域創成科学研究科の伊藤耕三教授らが開発した次世代電気自動車ItoP(アイトップ/Iron to Polymer)の説明・試乗会を行いました。キャンパスのメイン通りを走行する試乗会には、短い時間にもかかわらず、100名近くの方が来場しました。一般の方にも理解を深めていただくため、昨年9月末から日本科学未来館を皮切りに全国の大学や公共の場所に巡回してきましたが、GW明けからは柏IIキャンパス新棟で見学できるようになります。ItoPを見にぜひお越しください。



CLOSE UP 倉本聰さんが東大基金の寄付者インタビューに登場

(社会連携本部)



「北の国から」「前略おふくろ様」など数々の名作で知られる脚本家の倉本聰さんは、本学文学部美学科の卒業生。活動の拠点を富良野に置き、北海道演習林の高橋延清第5代林長との縁も深かったご本人から東大基金へご寄付いただいたのを機に、今回のインタビューが実現しま

した。学生時代の思い出、現代の東大生への期待、はたまた黒板家の先祖を描く「北の国から」の続編構想まで語ってくださっています。演習林内の「カツラの谷」に設置する記念樹プレートに題字を揮毫いただく予定もあるとのこと。黒板一家やサブのファンならずとも必読です！

平成30年度「東京大学総長賞」授与式を開催

本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著な団体・個人を対象とする学生表彰「東京大学総長賞」の授与式が、3月20日に小柴ホールで実施されました。

総長大賞は、「四度目の正直」で箱根駅伝に出場した近藤秀一さん(工学部)、「代謝物の漏出とやりとりによる細胞間分業と共生の数理・物理・経済学」というテーマで研究した山岸純平さん(教養学部)の2人が受賞しました。総長賞は、課外活動・社会活動等の分野では、教育学部附属中等教育学校で生物部指導部員として活躍した原田一貴さん(総合文化研究科)、

セキュリティに関する知識や技術を競う国際大会で優勝した理論科学グループ、アメリカミズアブを用いた食品リサイクルプロジェクト「Grubin」の川本亮さん(教養学部)・高橋宗知さん(同)・山田陸さん(工学部)が受賞。学業分野では、①板倉健太さん(農学生命科学研究科)、②川畑幸平さん(理学系研究科)、③坪山幸太郎さん(新領域創成科学研究科)、④村岡恒輝さん(工学系研究科)、⑤安田憲司さん(工学系研究科)、⑥蘆田 祐人さん(理学系研究科)の6人が受賞しました(受賞内容：右表)。おめでとうございます。



- ①画像処理及び深層学習を用いた植物の3次元情報解析
- ②非エルミート物理における対称性とトポロジに関する基礎理論構築
- ③生命のダイナミックなしくみを自分の目で見て理解する
- ④実験化学、計算機化学、データサイエンスの融合による設計的ゼオライト合成
- ⑤磁性トポロジカル絶縁体積層構造における創発輸送現象
- ⑥開いた量子多体系における測定の反作用と強相関効果の解明

部局長交代のお知らせ https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/info/retirement_h31.html

2019年4月1日付で下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記URLをご覧ください。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科・法学部	大澤 裕	岩村正彦
大学院医学系研究科・医学部	齊藤延人	宮園浩平
大学院人文社会系研究科・文学部	大西克也	佐藤健二
大学院理学系研究科・理学部	武田洋幸	(再任)
大学院農学生命科学研究科・農学部	堤 伸浩	丹下 健
大学院経済学研究科・経済学部	渡辺 努	持田信樹
大学院総合文化研究科・教養学部	太田邦史	石田 淳

	新部局長	前部局長
大学院教育学研究科・教育学部	秋田喜代美	小玉重夫
大学院薬学系研究科・薬学部	一條秀憲	(再任)
大学院新領域創成科学研究科	大崎博之	三谷啓志
医科学研究所	山梨裕司	村上善則
地震研究所	佐竹健治	小原一成
大気海洋研究所	河村知彦	津田 敦
先端科学技術研究センター	神崎亮平	(再任)



人文社会系の学術書出版とオープン・アクセス

今年の初め、専門としている経済史の分野で取り組んできた共同研究の成果が、アメリカの大学出版会（University of California Press：UC Press）からオープン・アクセスの学術書として刊行された。無料でダウンロードできる電子版と、比較的廉価なペーパーバック版の二本立てである。

学術雑誌の世界で、電子ジャーナルが一般化してすでに久しいが、近年ではオープン・アクセスも一つのトレンドになっているようである。それが体系的な著作の刊行に意義を認めている人文社会系の領域にも及んできたということであろうか。そこで指摘されているのは、英語圏での学術書・専門書の価格の高さである。研究者・学生の個人での購入に大きな制約となっているのはもとより、図書館による書籍購入予算への圧迫も問題視されている。一方で、著作権保護の観点から近年は図書館所蔵本の複写に大きな制約があるため、筆者も授業でのリーディング・リスト指定に際して、支障を感じるが多かった。その点で、オープン・アクセスが福音であることは間違いないし、著者にとっても広い範囲で読み手を獲得できることは望ましい。

問題は、このプログラムの規模と持続可能

性である。販売収入を前提としない中で、目利きの編集者の育成と確保、ピア・レビューの実施と評価、編集実務の水準の維持など、学術出版の質を担保するためのコストをどのように賄うことができるのか。

出版契約を結ぶにあたって、筆者側も一定の資金を提供した。ただその金額は、同程度の書籍を日本で出版する際に、著者側が科研費の出版助成などを通じて用意する金額をかなり下回る水準であった。大学や出版会自体が有する基金、およびこのプログラムに協賛する大学図書館からの協力金に基づく、UC Press側からの支出が大きな意味を持っていたことが推測される。別言するならば、学術書の出版コストの多くは、この基金・協力金への出資者が負担していることになる。現時点では、日本の学術書の価格水準は英語圏ほどではないが、読み手側の支出（負担）を基軸とする現在の構造からの変革が、模索されるべき時が来ているのかもしれない。

谷本雅之
（経済学研究科）

